

# 鬼神に横道なきものを

森岡 稔

## 第1章 鬼女

《いったい何本の松があるのでしょうか》

和泉式部は、細長く伸びた砂嘴（さし）に生えた松並木の眺めは、いつ見ても美しいと思った。天の橋立は、与謝（よさ）の海を真一文字に切っている。陸地と天の橋立によって阿蘇海という入り江がつくられる、稀にみる景勝の地だ。波打ち際から見える海水は、浜の砂粒が比較的大きいからか、波が洗ってもすぐ透き通った。

和泉式部は、国司の館から時折わずかの者を引き連れて天の橋立を見に来た。式部は海を見ていると時間の経つのを忘れてしまうのだった。波の音を聞き潮風にあたりながら、すうっと伸びた天の橋立の砂嘴を見ていると不思議と心が安らいだ。心に積もった塵芥が、きれいに払われていく。

男性遍歴の豊かだった和泉式部の最後の夫は丹後の国司、藤原保昌。国司の館は宮津にあって、天の橋立を見ようと思えばすぐ見れるのだが、身分上、館から気軽に出ることはできない。今日は久しぶりで海を見にやってきたのだった。

海だけでなく、和泉式部は丹後の生活環境が最近好きになってきていた。海で働く漁師や、狭い田畠を耕す農民たちの暮らしが身近にあった。彼らにとって、生きて行くことは、「生活」していくことであり、恋愛で明け暮れる浮草のような宮中の世界とはかけ離れたものだった。

血色の悪い青白い化粧をした顔よりも、赤銅色に日焼けした汗のにじむ顔が、和泉式部に生きているという実感を呼び起してくれた。丹後の守として赴任する夫の藤原保昌について、ともに険しい丹後路を輿で越えてきた時、和泉式部はさすがに心細く感じた。しかし、海を見たい一心がその恐怖感にうちかった。

「海はまだ見えませぬか」

和泉式部は何度も従者に聞いた。

海にそれほど恋い焦がれるのは理由がある。

かつての夫である和泉国司橋道貞（たちばなのみちさだ）とともに行った和泉の海が、恋に傷ついた心を癒してくれた経験があるからだった。

「丹後の国へお連れください」

式部が、そう藤原保昌に懇願したときは保昌は式部の言葉をにわかに信じることができなかつた。

「鄙（ひな）びたところぞ」

「もとより承知しております」

保昌が驚いたのも無理はない。

和泉式部は、生粋の都人である。藤原道長の取り持ちで一方的に和泉式部を手に入れた保昌は、式部が自分のことと本当は好きでもないことは充分わかっていた。

丹後が辺境の地であり、『地の果て』とまでは言えないが、そんな遠くへ付いて行けるのは愛する人があってのことであるのは、今も昔も変わらない。

若くもない、しがない国司についてきてくれるるをあって、保昌は小躍りした。

和泉式部が、前の夫橘道貞と別れて、帥宮敦道（そちのみやあつみち）親王と燃えるような恋をして、それを綴ったのが『和泉式部日記』として残っている。最愛の帥宮も熱病で他界し、悄然（じょうぜん）の和泉式部をみかねた父、大江雅致（おおえのまさむね）は関白道長に頼んで、藤原道長の娘、一条天皇の中宮彰子のもとへ歌詠みとして出仕させることにした。

道長はすでに娘の中宮彰子（しょうし）のもとへ、紫式部や赤染衛門（あかぞめえもん）などを出仕させていた。娘に文学的教養をつけさせるためである。

そうしているうちに、道長の家司、藤原保昌との縁談話がもちあがり、保昌五十三歳、和泉式部三十三歳で結婚することになった。表向きは藤原保昌と和泉式部との縁談は道長がとりもつた形になっているが、実際は藤原保昌が、和泉式部を娶りたいと道長に『恩賞』として願い出たのであった。

数多くの激しい恋によって、宮中で『浮かれ女（め）』などと噂される和泉式部ではあったが、美貌と教養を兼ね備えた式部に文を寄こす男はあとを絶たなかった。藤原保昌はそんな和泉式部を勝ち取ったことを男として誉れとさえ思っていた。

それにしても、『恩賞』とは何に対する恩賞なのか……。

話は二年前の京にさかのぼる。

京堀川の一条戻橋に柳がそよそよとゆらめき流れていた。

月明かりが橋を照らしている。橋の方に向かって一見横着な座り方で馬に乗ってやってくる武士がいた。

渡辺綱（わたなべのつな）。京において武勇で名を馳す源頼光（みなもとのらいこう）の家来である。

綱は、坂田公時（さかたのきんとき）・碓井貞光（うすいのさだみつ）・卜部季武（うらべのすえたけ）らとともに、名にし負う頼光の四天王に数えられている。綱は頼光の父満仲の婿、敦（あつし）の養子になっているので頼光とは主従の関係とはいえ、同族であるともいえる。

主人頼光の使いで一条大宮に住む一条帝の蔵人頭（くろうどのとう）、藤原行成（ふじわらのゆきなり）の屋敷まで出かけた。その帰り道であった。

綱が先刻まで訪問していた蔵人頭、藤原行成…。清少納言と、とかく浮名を流し小野道

風（みちかぜ）・藤原佐理（すけまさ）とともに三蹟と呼ばれる書の達人であるばかりか藤原道長の片腕でもあった。

「はっくしょ」

大きな嘆（くさめ）が出た。妙に生暖かい風が綱の鼻孔をくすぐったからである。

源頼光の屋敷は一条戻橋のすぐ近くにあった。一条戻橋という名前は、かつて淨藏（じょうぞう）という僧が、死んだ父を加持祈祷（かじきとう）によって蘇させたことから命名されたという。

綱は、頼光の屋敷までもうすぐだと思い、橋の西のたもとでいったん馬を止めて居すまいを正した。襟を揃（そろ）えてふと前方を見ると橋の東のたもとに人がいるのに気が付いた。どうも若い女のようであった。

目を凝らして見ると、その女は紅葉散らしの被衣（かつぎ）をかぶって、川面（かわも）を思案気に見つめているようすだ。

《すわ、入水（じゅすい）か！》

綱は一瞬そう思った。

「もし、そなたそこで何をしておる。川に飛び込もうなどと考えなさるなよ。それに、こんな夜更けに女子（おなご）一人とは物騒ではないか」

綱は、女の入水をとりあえず引き留めようと、馬上から女に声をかけた。

「そうです、そのとおりでございます。ですから、あなたさまのような強そうな殿方にお送り願いたいと思い、このようにお待ちしていたのです」

入水ではなかったので綱は一応安心したが、初対面の男に送ってもらいたいとは、いかにも軽々しい女だと思った。だがそれはそれ。頼りにされた相手は美人である。不自然な理屈など気になるはずもない。

「ほう、そうか。それにしても、危ないことよ。で、どこまでお送りいたせばよからうのう」

そのとき、渡辺綱にほのかな浮気心が宿った。

よく見れば、透き通るような白い肌だ。綱のような剛の者をまいらせるには刀よりも色香が有効である。

「お言葉に甘えて、五条にある私の家まで送って頂きとうございます」

「よからう。さあ、まいろうではないか」

渡辺綱が前鞍に乗せようと馬上に引き上げるため女に手を差し伸べた。柔らかな手応えと女の甘い香りが綱の情感をさらに搔（か）きたてた。堀川小路を南に下がって、正親町小路あたりまで来た。

手綱（たづな）を握るのをいいことに、女を抱きかかえるようにして馬を進めていく。女も綱にしなだれかかるようにしている。

綱は『こんな機会（おり）もたまには世にはあるものだわい』と、一種の幸福感に包まれ、ほくそ笑んでいた。

すると、そのだらしなくなった綱の心の隙を狙いすましたかのように、女が急に振り返っ

た。その女の形相はものすごいものに変化していた。般若（はんにや）と言えばいいのか鬼女と言えばいいのか。

間髪を入れずその鬼女は、すごい力で綱の髪（もとどり）をつかんで、綱の体ごと宙に引き上げようとした。

「何をする！」

綱は驚きはしたものの、さすがに音に聞く武士である。綱は肝がすわっていた。初めは空を鬼女が飛ぶように思われたが実は単純なからくりであるとを見破った。

腰の縄が近くの木の枝に結ばれていて、枝の反動で綱を引き上げようとしていたのだ。したがって、綱はたいした恐慌をきたさずに、すぐに腰の刀の柄に手をかけ、抜いた刀が弧を描いた。刃は髪を驚づかみにしている鬼女の腕をすぱっと切り落とした。

「グエッ！」

刀は主人頼光から預かった名剣『髭切（ひげきり）』である。頼光は二本の名剣を持つ。一つはこの『髭切』で、もう一つは『膝丸（ひざまる）』という。

源頼光の父、満仲が鍛治に命じて八幡宮に祈願しながら必死に六十日も鉄を打って造りあげたという。

腕を切られた鬼女は、宙を舞うようにして身軽に家の屋根づたいに愛宕山（あたごやま）方面へ走り去った。

綱は自分の肩のあたりで何か蠹（うごめ）いていのを感じた。振り返ってみると、綱の髪をつかんだまま腕がまだ生きているではないか。それは、一個の独立した生き物であった。頑強に髪をつかんで絶対離さない様子である。

「うむ、この妖怪めが」

綱がその腕から髪をもぎ取ろうとしたが、腕はいっそう握力を増しているようだ。

仕方なく、綱は自分の髪ごと小刀で切り取って腕を綱から分離した。すると、あざ笑うかのように、腕は綱の髪を手放した。腕は、渡辺綱に屈辱を与えれば、それでよかったのだ。髪を切ったので当然、綱の髪はざんばらになってしまった。

「くそっ、何たる始末（しまつ）……。髪がこんなふうになってしまった理由（わけ）を頼光様に説明せねばなるまい。それに、どうもこれには深いからくりがありそうだ。ううむ……」

綱はいまいまく思って歯軋りをした。まだ腕はひくひくと動いている。こんな気持ちの悪い物を何の因果であろうか、証拠品として頼光の屋敷まで持っていくかなければならない。綱は、再び源頼光の屋敷に向かった。

「それにしても、ひどい目にあったものだわい。女は魔物よ、くわばらくわばら」

そう言って、馬上の綱は苦笑いをした。

綱ともあろうものが、女に下心を抱いて思ひぬ不覚をとったのだから、世間のもの笑いの種になりかねない。羞恥からの苦笑いであった。

すると綱は急に何かを思い出したかのように懐（ふところ）を探り始めた。ただし、金子（き

んす）を掏（す）られたと思ったのではない。綱は一条大宮の蔵人頭行成から預かってきた大切な書状を思い出したのである。先程の鬼女との格闘でその書状を落としたかもしれないと思った。

懐にある書状を確かめて綱は安堵した。

「よしよし、銭など盗られても屁でもないが、これを失くしては切腹ものだからな。髪がこんなふうになってしもうたが、髪などじきに生えるからの」

額にかかったざんばらの髪をうるさそうに左右に振りはらいながら、独（ひと）り言（ご）ちた。さすが剛の者である。命を狙われてもどうということはなかった。主人からの命令の遂行こそが、武士の綱にとって絶対的なものであった。腰に差した鬼女を斬った『髭切』はこれ以後『鬼切』と呼ばれるようになる。渡辺綱という男、とかく世間で話題になる武士であった。

だが人の口にのばることで言えば、綱の主人の源頼光も負けてはいない。

『源頼光』——。武士でもあり、公家でもある。頼光は藤原兼家とその子道長と、二代に獻身的に仕えることで各地の受領に任じてもらい、財をなしていた。

道長も、この頼光を家司（けいし）として召し抱えて、身辺警備の武士の役割をもたせ、莊園のみならず律令の基盤となる公領からも私的な利益を集めさせていた。

平安王朝時代とは、道長に限らず貴族が武士をこのように都合よく使った時代であった。もう夜も更けていたので、待ち兼ねた様子で頼光は出てきた。

「行成様からの書状は持ってき……」

言い終わらないうちに、源頼光は綱のざんばら髪を見て驚いた。

「な、何だその髪は」

「その理由（わけ）はこれでございます」

まだ指が動いている腕をぬっと差し出した。

「うわっ」

武勇でも知られているさすがの頼光も、唐突に血だらけの腕を見せつけられては、仰天せざるを得なかった。

「それよりも、まずはこれを」

綱は懐から大事そうに行成からの書状を出して渡した。

書状を渡すことが第一目的であったので、綱は渡し終わると気が楽になった。

そして、綱は頼光に一気呵成（いっきかせい）に一条戻橋から始まった一部始終を話した。頼光は気味の悪い腕を見ながら、綱の話を黙って聞いていた。綱の話が全部終わったところで頼光は口を開いた。

「よし、事の次第は大方わかった。こういうことなら晴明に相談するに限る。晴明の屋敷はすぐそばじゃ」

「陰陽師（おんみょうじ）の安倍晴明（あべのせいめい）でございますね」

綱にも多分頼光が安倍晴明の名を持ち出すだろうと察しがついていた。

なぜなら安倍晴明といえば当時並ぶ者がない希代（きたい）の陰陽師であるし、土御門（つみかど）北、西洞院（にしのとういん）大路東にある晴明の屋敷は、源頼光の屋敷の南側にあって、歩いて行ける距離である。

綱は、頼光が安倍晴明の名を言わなければ、自分が晴明の助力を提案するつもりだった。陰陽寮というのが内裏にある。安倍晴明はそこに仕える言わば官僚の陰陽師であり天文博士でもあった。仕事柄、風変わりな伝説には枚挙にいとまがなかった。

たとえば、寛和（かんな）二年（986年）六月に藤原兼家（かねいえ）とその子道兼（みちかね）が策謀して花山（かざん）天皇を出家させて東宮の一条天皇に帝位を移そうとしたときの話もその一つである。

夜中に、安倍晴明の屋敷前を花山天皇が通過しようとしたところ、中から晴明の声がした。  
「天文で占うと、どうも天皇が譲位したらしい。参内しなければ」

そして、晴明が使役する式神が、帝の後ろ姿を見て、  
「帝が通り過ぎて行かれます」と晴明に知らせた。

式神（しきがみ）とは陰陽師の命令のままに動く鬼神（きじん）のことを言う。式神に身の回りの世話や護法の手伝いをさせた。陰陽師がその気になれば式神を使って、呪詛や人殺しまでできたと言われた。

晴明は、いろいろなものに変化するという式神に、使い走りや偵察、洗濯や炊事をさせていたようだ。だが、式神の正体は、実際はたぶん賤民扱いされた、世人が相手にしない川の民や山の民であったと考えられる。中には、靈力が強いとされる異形の者も含まれていたのかもしれない。

貴族たちは病気になったりすると、数ある陰陽師の内でも特に晴明に依頼した。当時、病気の原因は物の怪であり、晴明に頼むと確実に調伏（ちょうふく）してくれたのだった。本来は吉凶を占うのが陰陽師の役割であるのだが、時折はそういうことも請け負った。貴族たちは陰陽師の第一人者である晴明を重宝した。頼光はすぐにでも晴明のところへこの腕をもって走りたかった。しかし、すでにもう夜更けであった。

「明朝早く晴明の所へ行くことにしよう。そなたは今夜はここに泊まっていくがよい。おぬし、それまでそれを見張っておいてはくれまいか」

「もとより承知」

綱はそう答えた。しかし、実のところ豪胆な綱でも、斬り取った腕など枕もとに置くのは好まない。まさか腕が襲ってくることはあるまいが、夢見がよくないだろう。

それにしても、鬼女に襲われたのは綱であるから、当然腕の処理は綱の範疇にあるべきはずである。それが、なぜ普通なら腕を持ち込まれて迷惑なはずの頼光が逆に腕を見張っておいてくれと依頼するのか……。

実はそれには頼光と綱にだけ通じる理由があった。

つまり、綱が襲われた原因は綱が行成から預かった書状にあるのだ。だからこそ川にでも捨てればよかつた腕を、頼光にわざわざ見せたのである。髪がざんばらになったということ

を証明するだけのために、気持ちの悪い腕を頼光の屋敷に持ってきたわけではない。生靈とか夢見が現実に影響すると、まともに信じる時代のことであるから、奇妙な腕が祟るのを頼光や綱は恐れた。ただし、腕が祟るのは、腕を斬った綱にではなく、狙った書状受取人の頼光であるから、綱は勝手に捨てることができなかつたわけである。

穢れを払わなくては、何事も進まなかつた。

綱は、帝の直轄秘書とも言うべき藏人頭（くろうどのとう）行成と『あること』を相談し、書状を手渡されて行成の屋敷を出た。そして、それを頼光に届ける途中で鬼女に襲われた。明らかに書状を狙っての襲撃であった。

行成から頼光に宛てた書状の内容は何だったのか……。

あまり寝付かれぬままに朝を迎えた源頼光は、腕を頑丈そうな木箱に入れて渡辺綱とともに安倍晴明の屋敷に赴いた。綱は昨夜はざんばらの髪をしていたのに、短時間のあいだに器用に髪をまとめあげていた。

晴明の屋敷を訪れるものは数少ない。なぜなら晴明は式神を扱うので、気味悪がって近づかないからである。

晴明の妻、利花（りか）もやはりこの式神が怖いといって晴明に家には置かないように懇願し、晴明は仕方なく一条戻橋のたもとに住まわせたのだと世間は尊した。

しかし、式神は実際は下男、下女のような者たちであったから、晴明の屋敷から近くの、もともと自分たちの住んでいる粗末な住居に戻って休んだにすぎなかつた。

晴明屋敷が頼光の屋敷から近くても、実際に晴明の屋敷を訪れるのは二人とも今回が初めてであった。

晴明に会うのはもっぱら官舎のなかだけにしている。妖（あや）しの雰囲気に満ちた晴明屋敷など好んで行くところではなかつた。

晴明は訪れた二人の顔を見るなり、

「朝早くからお越しとは、さては昨夜の戻橋の件でございますか」

と、自信ありげに言った。

頼光はなぜ晴明が知っているのか訝（いぶか）った。

「それは頼光様、こんな近くで妖気が漂えば気づきますよ。それに戻橋には私に仕えている式神が住んでいますから……。昨夜も式神がさっそく様子を事細（ことこま）かく知らせに来ました」

「式神が……」

驚いて、間抜けたような表情で頼光と綱は顔を見合せた。

二人とも、世間が信じるように式神は鬼神だと思っている。この世のものでない式神が晴明に命じられて屋敷の周囲を見張っていたのだと想像したのだった。

頼光の式神が、一条戻橋にもともと住んでいる下男、下女であるとは思ってもみない。草木で彼らの住居は覆われているし、人が住んでいるとも思えないほど粗末なものであつたので、近くに住んでいる頼光もわからなかつた。

「それ、先ほど茶を持って来たのもそれですよ」

頼光たちを玄関から部屋に案内し、お茶まで出してくれたあの女中さえもが式神とは……。

頼光や綱は、式神をすっかり妖しの類（たぐ）いだと思っているので、尻にしっぽのような隆起があつたような気がするとか、指の数の本数がおかしかったとか、いろいろな疑心暗鬼を生じさせていた。

「そこの包みはその暴漢の切り落とした腕ですね」

『暴漢』の『漢』という言葉に渡辺綱は違和感を覚えた。「漢」は男を表す言葉であるからだ。綱は、晴明に間違いを正すように言う。「私が襲われたのは鬼女でございます。男ではありません」

「ははは、男ですよ男。式神は茨木童子（いばらぎどうじ）という鬼だと申しております」

「茨木童子……」

頼光も綱も異口同音にそう言って、また顔を見合わせた。

そう言われてよく見ると、その腕はまさに男の腕である。頼光と綱は、今まで女の腕だと思いつ込んでいたのだった。

丹波の大江山に住むという変幻自在の鬼、茨木童子にとっては女に変装し、一条戻橋で綱に女と見間違えさせることなど、たやすいことだった。茨木童子とは、大江山に住む酒呑童子の参謀格の家来である。大江山から京に降りて来ては、貴族の姫をさらって連れ去るという噂があった。

そして、茨木童子の主人、酒呑童子は文字どおり酒を好む「鬼」とされており、さらってきたその娘たちを侍女にしたり食べたりしているという話であった。

茨木童子が綱を襲うことは、実は晴明が式神からの報告を聞くまでもなく、晴明の占つた『卦（け）』にすでに出ていた。あまつさえ、綱が襲われる理由も晴明にはあらかたわかっていた。おそらくや、陰陽師である。

式神からの知らせは、晴明の卦の正しさを裏書きするにすぎなかった。

「茨木童子が何で綱を襲う？」

頼光が心の動揺を押し隠そうとしながらも上気してしまった顔で言うと、晴明はそれとは好対照に、とりますました表情で返答する。

「おわかりでしょう」

「も、申してみよ。その理由（わけ）を」

「しかたありません。申し上げます。茨木童子は行成様の一条大宮のお屋敷からずっとつけてきて、一条戻橋のところに待ち伏せしていたのです。おそらく、行成様の屋敷に忍び込んで綱様と行成様の会話を聞いたのでしょう。そして、茨木童子は頼光様宛の書状を奪おうとして、綱様を襲ったのです」

理由（わけ）を言ってみよと自分から命じた頼光は、べらべらと機密事項を話す晴明の口を今さらながら、手で封じたい気持ちに駆られた。

そもそもできない頼光は人に聞かれてはまずいと思い、思わずあたりを見回しながら、「しっ！」

と、晴明のしゃべるのを制止した。

晴明がは木童子が綱を襲うことも知っていた。それを聞いて、頼光は今度はそのことを晴明に難詰（なんきつ）し始めた。

「晴明、綱が襲われることを知っていて、なぜ私にあらかじめ知らせなかつたのだ」

「渡辺綱様ともあろうお方が、よもや襲われてもどうということもあるまいと判断したからでございます」

綱は変な持ちあげられ方をして、どういう態度をしてよいか困った。

「一条大宮の蔵人頭行成邸に忍び込んだ茨木童子が聞いた行成様と綱様の会話とは、つまり『大江山討伐』のことのございますね」

晴明は真顔になって、そう言った。

「うむ……」

頼光は絶句した。

《ここまで知っているのか、晴明は。おそろしいやつ》

晴明でなければ機密保持のために、とっくに斬っているところである。

「先立（せんだ）って、盗賊の鬼同丸をお斬りになったでしょう。その敵討（かたきう）ちに茨木童子は、頼光様と綱様をつけねらっていたのです。茨木童子は外出した綱様を尾行したところ行成様の屋敷にたどりつき、行成様と綱様の重大な話を盗み聞きしてしまったのです。そして敵討ちどころの話でなくなった。ぜひとも書状を奪い取り、廟堂の大江山討伐の計画をつかんで、酒呑童子に報告せねばならないと茨木童子は考えたのですよ。しかし、名剣『髭切』と綱様の剣さばきには勝てず、茨木童子は腕を切り取られたという次第です」

《やはり、書状が狙いだったのか。しかし鬼同丸のことは意外であった》

「書状が奪われなかつたとしても、酒呑童子に大江山の討伐のことが知れたとなると、酒呑童子はさっそく大江山の警備を固めるでしょう。ひょっとしたら、すでに廟堂に刃向かう準備を進めているかもしれません」

大変なことになったと、頼光は鉛を飲みこんだような顔になった。

《大江山討伐の計画を酒呑童子に知られた……。そして、朝廷に対する反撃を準備している可能性もある……》

事の重大さに、頼光は震えた。

「まあ、とりあえずその腕には恨みがこもっている生靈ですので、鎮（しず）めなければなりませんでしょう」

そう晴明に言われて、眠りから目覚めたように腕の存在を思い出した。

頼光は、酒呑童子の話に夢中になって腕のことをすっかり忘れてしまっていたのだった。

ところで、茨木童子が綱をつけねらうことになった鬼同丸のための復讐とは……。

## 第2章 鬼同丸

綱が襲われる前年の冬、ある寒い夜に、頼光は弟の源頼信（よりのぶ）の屋敷に渡辺綱・坂田公時・碓井貞光・ト武の四天王を連れて立ち寄った。

暖（だん）をとるために、頼信はもう酒を飲んで陶然（とうぜん）としていた。そこへ、大好きな兄者が訪問してきたから、たちまち大酒宴となった。

公家の子弟であれば源氏物語のような『雨夜（あまよ）の品定（しなさだ）め』のような浮いた話になるのであるが、四天王や頼光、頼信ともなるとやはり互いの武勇伝となる。

こういう座談の時、司会役をかつてでる貞光は、まずト部季武の豪胆さを話題にすることにした。

「美濃での季武の肝はすわっておったな」

貞光がそう言うと皆は貞光に賛同するように、頷いている。それは、源頼光が美濃の国司として赴任した際に、四天王も同行した。そのときの話であった。

「渡川のことなら、言わずにおこうぞ……」

季武は本当は話題にして欲しいのに、わざと嫌がる素振りをした。

美濃国にある渡川近くの詰所で四天王が酒を飲んでいた。そして、誰ともなく渡川の『産女（うぶめ）』という化け物の話を持ち出した。産女という妖怪は、難産で命を落とした女の亡靈らしかった。

「川を渡る時に、『赤子を抱け』と近寄って来るらしいぞ」

碓井貞光が、そう言った。

「赤子を抱くはいいが、その赤子はだんだん大きくなって、喉元に食らいつくというぞ」もともとは、捨て子であって赤子の話になると弱い坂田公時がつけ加えた。

橋など懸かっていることがむしろ珍しい時代である。川は歩いて渡る。渡川で、『産女』が声をかけてくるというのである。

武士にとっては、むしろ刀で斬りつけてくる者の方が対処しやすい。産女など、どう扱つていいのかわからないのだ。

『拙者（それがし）が渡ろう』とト部季武が言い出した。

興に乗って、兜や刀、鎧や弓などがその肝試しの成否に掛けられた。

「ではまいろうではないか」

皆、同時にそう言って渡川まで馬で疾走して行った。

問題の渡川に到着した。生臭い風が吹き、墨を流したような夜陰の中から、いかにも産女が出てきそうな雰囲気が漂っていた。

馬から降りた季武は、不気味な雰囲気にも動じることなく、川の中に入つて行った。確かに川を渡ってきたという証拠として矢を向こう岸に突き刺してくるという約束がなされた。『ざっざっ』と水をかき分ける音が続いたかと思うと、『ざくっ』と矢を向こう岸の地面に

突き刺す音がした。

季武は、約束を果たして戻ろうとした。

こちら岸では、皆が、『何だ産女など出なかつたではないか』と拍子抜けしていた。すると、闇のむこうから、やおら声が聞こえてきた。

「これを抱け、これを抱け……」

岸にいた三人はその声に恐怖でこごえた。併せて、赤ん坊の泣き声も闇の中から聞こえる。

「抱けばいいのだな」

産女の言ったことに季武が答える。

「そうじゃ」

季武はどうも赤ん坊を、産女が言う通りに抱いたらしい。

すると、今度は急に気弱そうに産女が季武に訴えた。

「返しておくれよ」

「抱けと言ったではないか。抱けと言ったり、返してくれと言ったり理不尽ではないか。赤子は連れて帰る」

産女のすすり泣く声がした。

「返しておくれよ」

さかんに産女が叫ぶ。そうしているうちに、季武が岸へ戻ってきた。背負う格好をしているが赤ん坊の姿は見えない。そのかわり背中には木の葉が、数枚張り付いていた。

皆は身の毛のよだつ思いがしたが、一方で季武の豪胆さに感心した。

詰所の侍部屋に帰ってきて、約束どおり、賭けの武具を季武に差し出すと、

「これしきのこと、だれでもできるわい」

と、言って辞退した。

皆は感じ入って、酒を季武の杯に挙（こぞ）って注（つ）ごうとした。

「おおつと、酒がこぼれるに……もったいない。その方がおそろしい」

皆、笑い転げた。

さらに、順番に武勇伝が繰り広げられた。

藤原保昌と盗賊『袴垂（はかまだれ）』の話。貞光が、頼信に無礼をはたらいた者の首を味方の少ない東国で討ち取って、頼信の兄、頼光から褒美に『光』の字をもらい貞通から貞光と名を変えた話。渡辺綱が羅城門で鬼と戦った話。

坂田公時の足柄山の話になるころは、宴もたけなわになった。

すると突然ものすごい唸り声が外庭から聞こえてきた。

頼光が不審に思い頼信に尋ねる。

「頼信！あの唸（うな）り声は何だ」

「ああ、泥棒が先（せん）だって侵入してきたので捕えたのです。厩（うまや）の方の大きな木に縛り付けておきました。そのうちに検非違使にでも引き渡そうと考えておりました」

「呑気なことを言っておるわい」

気になって、渡辺綱と坂田公時が廻へ、その盗賊を見に行った。

坂田公時が興奮しながらもどつてきて言った。

「頼光様、あれは鬼同丸（きどうまる）という盗賊です。大物ですよ」

大物ということを聞いて、頼光に闘争心にも似た好奇心が働いた。

早速、頼光も廻の方へ見に行くことになった。

「鬼同丸とやら、頼信の屋敷と知らずに忍び込んだのか大馬鹿者め。この頼光、そして弟頼信は武門の棟梁である。おまえらなどが東になってかかってきても屁でもないわ。もう少し相手を選ぶことだな、はっはっはっ」

頼光は、酒の勢いも手伝って鬼同丸を罵倒する言葉を吐いた。

「この屋敷が頼信のものであることは、もとより承知だ。民から巻き上げた米や錢をとり戻そうと思うたが、へなちょこ相手に思わぬ不覚をとったものなのう」

鬼同丸が、腹を立てながら言った。

不敵な鬼同丸の言葉を聞いて、今度は頼光が腹をたてた。

「巻きあげたなどと何という言い草じや。自分の民から徴収して何が悪い。道長様の家礼（けらい）である我らにそのような物言いは許さんぞ」

そう言って刀の鞘を首もとにぐいぐいと捩（ね）じ込んだ。痛みと憤怒で激しくじたばたした。すると鬼同丸の縄が緩んだ。これを見た頼光は、頼信を叱るように言った。

「頼信、縄が解（ほど）けそうになっているではないか。逃がさないようにして間違いなく検非違使に引き渡さなければならぬ。金鎖でもって縛りなおせ。本来なら即刻、斬り捨てるべきところだが、明日のことを思うとそもそもいかぬでな」

家人たちは、さっそく金鎖をどこからか持つて来て、横に、縦に、たすき掛けにと、鬼同丸をがんじがらめにした。

「うむ。それでいい。さて皆、飲み直しとしようぞ」

頼光は腹いせに鬼同丸に唾を吐いて、四天王たちと談笑しながら座敷にもどつて行った。

《この恨み晴らさでおくべきか……》

鬼同丸は心の中で復讐を誓った。

しばらくして夜も更けた頃、鬼同丸は金鎖から逃れた。関節をはずすいわゆる『縄抜けの術』をやってのけたのである。

頼光たちは酒に酔つて横になっていた。見張り番たちも丈夫な金鎖をしたので、もはや安心と思って義務づけられていた定刻の巡回を怠つた。

彼らは酒を台所からくすねてきて、燗酒を飲みながら世間話をしていた。鬼同丸は、屋敷を去る際に有力な情報を得ようと、屋根の破風（はふ）から忍び込んで、見張り番の詰めている部屋の天井のところまできた。

「明日は頼光様は、四天王の方々を引き連れての鞍馬参詣だとよ。わしらも頼光様のご威光にあやかりたいのう。なにせ、頼光様ときたら、お亡くなりになった兼家様（道長父）が二条京極にお屋敷を新造した時に、祝いとして馬三十頭を献じなさったくらいの羽振りのよ

さじや。どうせお仕えするなら弟の頼信様ではなく兄の頼光様の方がよかつたかもな」「これ、めったなことを言うでない」

頼光が『明日のこともあるでな』と言って鬼同丸を斬りするのをやめたのは、鞍馬参詣を明日に控えて、刃傷に及ぶと穢れをつくってしまうので、それを忌避したのだった。

《頼光、今に見ておれ……》

鬼同丸は、頼光たちが鞍馬参詣へ行く途中の道で襲うことを決心した。

見張り番たちが言うように、頼光と道長の結び付きは強い。

藤原氏北家の九条流兼家の四人の息子たち道隆、道兼、道長、道綱の中で末っ子の道長以外は皆、疫病にかかって死ぬか失脚した。結局おっとり型の道長に権力が転がり込んできた。道長が、競争相手の兄道隆の子の伊周（これちか）を抑えて左大臣になったのは長徳元年（995年）。まさに、大江山討伐の年であった。

兼家に馬三十頭を献上したあと、頼光は直感で仕える主人を、時めく長男の道隆を選ばずに、あえて道長にした。

《あの方がきっと廟堂の首位にお立ちになる方だ。権力というのは意外にそれを得ようとしてぎらぎらしている者の所には行かない。むしろ、道長様のように落ち着いて構えているお方にこそ、権力が舞い込むのだ》

頼光の勘は当たった。

道長は三十才で内覽（天皇のかわりに文書に目をとおす）の役につき、右大臣、そして翌年には左大臣になって権力の階段を一歩一歩登っていったのである。

この世をば わが世とぞ思う望月（もちづき）の 欠けたることのなしと思へば

この歌は、寛仁（かんにん）二年（一〇一六年）に道長が五十三歳で太政大臣となって、三人の娘を次々と天皇の妃とし得意の絶頂の折に詠んだものである。

大納言藤原実資（さねすけ）を招いて宴を催した際に、実資に返歌を求めて詠んだ歌であった。こんな歌を詠まれては実資は返歌をしようもなくなつて皆を誘つて、この『望月の歌』を何回も口ずさんだという。

天下はまさにこうやって道長の手中に入つていった。

大江山討伐の頃の天皇は一条天皇である。

この一条天皇は円融天皇と道長の姉の誼子（せんし）との間の子。言わば道長の甥である。さらに、長保元年（九九九年）、道長は一条天皇に娘の彰子（しょうし）を中宮とするなど権力固めに余念がなかつた。

さて、鞍馬参詣を聞き及んだ鬼同丸は、奇襲をすべく先回りをしていた。

鞍馬寺へ行く街道の途中に市原野（いちはらの）がある。そこで鬼同丸は放し飼いにされている牛のうちで一番大きな牛を殺し、内蔵をえぐり出した。鬼同丸は、牛の腹の中に身を隠し、まるで牛が日なたでのんびりと寝ているかのように横たわつた。

まもなく、頼光と四天王が馬に乗ってやってきた。その勇ましい武者姿に、道を行く人たちも足を止めて、思わず拍手喝采を送るほどであった。

牛の放牧された市原野まで来た時、頼光は戯れのように四天王に言った。

「良い景色じや。どうだ、ひとつ牛追物（うしおうもの）でもやってみぬか」  
牛追物とは牛を馬上から矢で射って競い合うものである。

冬にしては珍しい陽気と野原のすがすがしい景色で、心も弾んでいた四天王は喜々として、馬を駆って牛を追い始めた。

しかし渡辺綱一人だけが皆とは方向違いに馬を走らせて、突然、逆頬簾（さかつらえびら）から矢を抜き弓に番（つが）え、路頭の木陰で寝ている大きな一頭の牛にねらいを定めた。

綱以外の四天王は、綱の行為の意味がわからず、啞然として見ていた。頼光だけが、どういうわけか冷静に渡辺綱の行為を見守っていた。

綱は充分に引き絞った弓から尖り矢を解き放った。矢は、『どん』という鈍い音とともに寝ている牛の腹に突き刺さった。

「それごとき、まやかしがこの綱に見破れぬと思うてか」

すると、牛の中から股に矢が刺さったままで鬼同丸が躍り出て来た。牛の皮を貫いて鬼同丸に矢が刺さったので、鬼同丸は重い牛の皮と肉と一緒に引きずっていた。

渡辺綱はすでに弓を投げ捨て、馬上にあるまま『髭切』を抜いていた。

頼光のみならず他の四天王も抜刀していた。鬼同丸は相手が五人でも、めざす相手は頼光一人である。頼光めがけて鬼同丸は、わき目もふらず躍りかかった。すでに頼光は、充分に気合を込めて戦う用意ができていた。

一方、鬼同丸は牛の皮を引きずっているので動作は機敏さを欠いている。勝負は見えていた。

『えいっ』という掛け声とともに一太刀（ひとたち）のもとに鬼同丸の首は打ち落とされてしまった。しかし、鬼同丸の恨みは骨髓に徹していたのか、切り落とされた首が頼光の馬の鞍（むながい）に食らいついた。

頼光は穢れたものでも払うように柄先（つかさき）で叩き落とした。大きな毬のように首は転がっていく。沿道で一部始終を見ていた村人たちは自分たちの方へ首が転がってくると、恐怖の声をあげながら、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑った。

しばらくして、一段落つくと血刀を振り切って血をとばしている頼光に向かって綱が話しかけた。

「やはり、昨夜の鬼同丸でした。出立（しゅったつ）するときに、門番が鬼同丸を逃がしたと騒いでいたので、ずっと注意をしていました。頼光様が牛追物を急に始めようとおっしゃったので、おそらく鬼同丸が潜んでいることに気づかれたのだと思いました。それからは動いていない牛が怪しいとにらんで無我夢中で矢を番えました」

「しかし、盜賊とはいえ、気概のある奴よ。首を切られてもなお、馬の鞍に食らいつくとはのう。昨夜はこしゃくな奴と思うてぞんざいに扱ったが、ある意味で、まことに骨のある者

であった。心を入れ替えれば、わしの家礼（けらい）にでも用いたものを……。惜しいのう」

綱と頼光は馬の轡（くつわ）を並べて進んで行く。いつになく頼光が感慨深げになっていた。また、四天王も、頼光の言葉を聞いて、しんみりしていた。

今でこそ、四天王と呼ばれているが、一歩間違えれば鬼同丸のように転落した人生になっていたかもしれない。鬼同丸の勇猛果敢さは、本当に味方なら戦力として使えたはずである。主客転倒は十分考えることができる。

ところで、実は鬼同丸は、茨木童子や酒呑童子と仲間である。

もちろん、そんな事を頼光や綱が知る由（よし）もなかった。

鬼同丸と茨木童子は、かつて共に八瀬村の鬼ヶ洞という洞窟に住んでいた。酒呑童子も大江山に住みつく前に、比叡山より降りて来たとき一時（いっとき）、八瀬村に身を寄せていたことがある。八瀬の鬼ヶ洞には、茨木童子の他にも何人かの童子がいた。

童子とは子供のことではなく、頭をおかっぱのような禿（かむろ）にし、もっぱら雑役に従事した者たちのことを言う。衣類はもっぱら木綿を主としていた。酒呑童子は他の童子に仲間入りさせてもらい働いているうちに、めきめきとリーダー格となり、他の童子を従えるようになった。

ところが、比叡山に最澄が根本中堂を建立するにあたり、比叡山ふもとの八瀬にもその勢力が酒呑童子たちを圧迫してきた。

童子たちの首領が、比叡山を追われるようにして、出て行った酒呑童子だと分かると、ますます嫌がらせをしてきた。残念ながら、酒呑童子たちに、比叡山と一戦交えるほどの力量は、まだなかった。

以前から大江山へ行く計画のあった酒呑童子は、これを機会に童子たちを八瀬から大江山へ大挙して連れていくことにした。

残った童子たちもいるにはいた。その子孫はのちの、延元元年（1336）正月、北条の軍勢に追われた後醍醐天皇が、八瀬へから比叡山へ逃れる時に、護衛についた。その功績で、後醍醐天皇から年貢を免除されたという謂（いわ）れを持っている。

酒呑童子が引き連れた郎党は、茨木童子を筆頭に、大江山の鬼の四天王として知られる童子たち、星熊（ほしくま）童子・熊童子・虎熊（とらくま）童子・金熊童子がいた。

八瀬残留組の方には、鬼同丸がいた。年老いた母親が住まいを移すのを頑として拒んだためである。主だった仲間が離れては、八瀬では仕事がはかどらない。困窮した鬼同丸はどうとう、貴族の中でも特に私腹を肥やすものを襲うようになった。戦利品は、母親だけではなく、八瀬の貧しい村人たちにも配った。

そして今回、頼信の屋敷で思わぬ不覚をとて捕えられてしまったが、鬼同丸は捕縛からまんまと抜け出すことに成功した。そこでやめとけばよかつたものを、頼光に罵倒されたので、持ち前の短気から、つい意地になってしまった。そしてそれが命取りになってしまったのである。

いつまでも帰らない老母の嘆きは計り知れなかつたことは言うまでもない。老母はやがて餓死していった。頼光に鬼同丸が討たれたことを聞いた茨木童子は、この上もなく憤慨した。

八瀬村では、鬼同丸とは兄弟のように育った茨木童子である。

《おのれ、源頼光、渡辺綱め。必ず鬼同丸の仇を晴らしてくれようぞ……》

ところが、綱を尾行していた茨木童子は、一条大宮の藤原行成の屋敷の天井から綱と行成の会話を聞いて、復讐以上の一大事を知つたのである。

ねらいは、綱の懷中の書状に変わつた。そして、茨木童子の一条戻橋の綱襲撃事件となつたわけである。

## 第3章 茨木童子再訪と土蜘蛛

安倍晴明の屋敷の庭は整然としている。他の邸宅のように苔むした岩や草が覆い茂つた様子がない。まるで人工的につくられた感じなのだ。

晴明は無駄が嫌いであった。星の運行を見て吉凶を占うことは、一種の科学である。陰陽師と科学とは一見そぐわないようであるが、星辰は秩序と法則のもとに運行するものである。

勘や靈感だけではもともと成り立たつものではない。その精神が庭にも現れていた。石庭に当時としては珍しく北斗七星をかたどった石が置かれていた。

頼光は初めて訪問するのではないが、殺風景な屋敷のたたずまいは、どことなく居心地の悪い感じがした。

それにしても、腕の処理方法を相談しにきたはずの頼光と綱であったが、あまりにも晴明が秘密を知悉（ちしつ）していたので驚きあきれて、しばらく腕のことをすっかり忘れてしまっていた。

秘密裏に進められた花山院の退位を陰陽道で知っていたぐらいの晴明である。大江山討伐などわかつても当たり前なのかもしれない。当面の問題は目の前の奇怪な腕である。腕が悪霊となって綱や頼光に禍をもたらさないよう呪術で封じ込めなくてはならない。

「どうすればよい、晴明！」

源頼光は晴明に対して、ほとんど叫び口調になっていた。

「はい、七日間謹慎し、鬼の手には封印をして祈祷には仁王経（にんのうぎょう）を読むことです」

「よし、わかった。そうすることにする。しかし晴明、おぬしは恐ろしい男よ。極秘なことを何でも知つておる。おぬしを敵に回したら枕を高くして寝ることができぬ」

「お褒めに預かり恐縮でございます」

「しかし、このことは内密じや、よいの」

「もとより承知」

大江山討伐……。表向きは攫（さら）われた貴族の娘たちを救出するためとされているが、大江山討伐の背景には、権力へのとてつもない野望が隠されていたのであった。

つまり、藤原道長と当時の清和源氏の棟梁の源頼光とが手を結んで大江山を攻略することが計画されていたのであった。では、はたして大江山の何が、権力者にとって垂涎の的（まと）となっているのだろうか。

まずは、藤原氏と清和源氏との連携の歴史を繙（ひもと）かなければならない。

源頼光の父は源満仲（みなもとのみつなか）という。満仲は清和天皇から数えて五代目にあたり、鎮守府将軍まで昇りつめた。

源満仲を有名にしているのは何と言っても、安和の変（安和二年・969年）であろう。安和（あんな）の変……。

事の起りは、源満仲の告発であった。その告発は、冷泉天皇のときに、源高明が皇弟を奉じて謀反を企てているというものである。

右大臣藤原師尹（もろただ）は、満仲のこの告発を取り上げて、源高明は太宰權帥（だざいのごんのそち）に貶（おと）されることとなる。

9世紀中頃から、朝廷内の政権争いで他氏を排斥していった藤原氏は、承和の変で橘氏を、応天門の変で伴氏を、藤原時平によって菅原道真は太宰權帥に左遷した。そして安和の変で源高明が配流させられていく。

つまり、安和の変とは藤原氏による他氏排斥運動の締めくくりだった。

これを機に藤原氏独裁体制は確立し、摂関政治を展開する。

安和の変における密告者の源満仲は着実に藤原氏とくに北家との結びつきを深めて、清和源氏の地歩を確固たるものにしていった。

満仲は摂津多田の庄に居住し、多田源氏と呼ばれた。摂津多田（せつただ）の地は金・銀・銅・鉄などの豊富な資源を産出したので、満仲は、その財力をもとに原初的武士団を形成し一族郎等を従えることができた。

満仲は武士であるとともに中級貴族としての顔があった。したがって自然と時の権力者、摂関家に寄り添って、もちろんたれつの関係ができあがった。花山天皇が寵愛した女御が妊娠八カ月で死んで失意に落ちていたのにつけこんで、兼家は謀略でもって花山天皇を出家退位させた。

兼家の娘詮子が先帝円融天皇との間にもうけた懐仁親王が皇太子であったので、早く花山天皇を退位させ天皇の母方の祖父として摂関の地位を確立したかったのである。花山天皇を山科の元慶寺まで人目を隠しながら護送したのは他でもないこの満仲であった。

多田の産する鉱石のなかでも、この時代の実質的に最も重要な金属は鉄である。『多田』の名は鉄をつくりだす設備『タタラ』から来ているともいわれている。

言うならば、満仲は摂津の産鉄王である。頼光はその二代目。鉄は武器・農具・建築材料とその用途は広い。多田で生産された鉄製の農機具は多田の南に広がる平野の灌漑・耕作に

使われて、米を初めとした多大な農産物をもたらした。

また、『タタラ』は新たに作るより、弱小のタタラを吸収し支配する方が簡単である。つまり、建設費用の節約と同時に、そこで働く者たちの技術と労働力を手に入れることができるからである。

大江山討伐も結局そのために計画されたのであった。

大江山のタタラが摂津の多田や大和で行われているタタラなど問題ならないくらいの巨なものであったので、接收は、廟堂を巻き込んでの国家的プロジェクトとなった。

もっと言えば、大江山には古代にまでさかのぼる歴史的意味がある。

酒呑童子は、越後から近江を経て、比叡山に移りすんだわけであるが、ルーツをたどればその祖先は越後の海人族である。

越後の海人族と丹後の海人族とは同族で、漁業・農耕・鉱業を営む文化の進んだ古代種族であった。とくに産鉄について高度な技術をもつていて、花崗岩から掘り崩される良質の砂鉄で精錬した鉄は、中国や朝鮮よりも優れていた。

海人族のうち、最大で最古のものが古代において丹後に住み着いていた。

丹後王国と言っていいほどの勢力の海人族の文化があったのである。その支配は広く今のが岡から紀伊半島まで及んでいたという。あの出雲王国ですら、丹後王国の一部が残ったものだという話もある。もちろん、のちの倭国を形成した大和王権は次々と丹後王国を侵食し、出雲王国さえも国譲りという形で支配下に入れてしまうのであるが……。

大江山の酒呑童子の集団はそんな日本の歴史のなかで、王権に反逆し、丹後王国の命脈を保つ『まつろわぬ民』たちの最後の砦であった。

朝廷は一日でも早くその勢力を取り除き、その鉄資源ならびに陸海交通の至便という利権を奪い取ることに血道（ちみち）を上げていた。いわば頼光たちはその目的を遂げるための特殊部隊であったのだ。

茨木童子が綱から奪おうとしたのは、すばり廟堂の大江山討伐の計画書であった。この作戦が酒呑童子に分かると、討伐の作戦は実行不可能になり、次の手を打つまでには時間がかかる。

そんな歴史的なうねりの中に頼光たちはいた。

鬼の腕に話をもどそう。

頼光は晴明が言うとおりに、鬼の腕を朱櫃（しゅひつ）に入れて、綱の屋敷で七日間仁王經を僧侶たちに読経させることにした。

読経し始めて六日目に、養母であった叔母が摂津渡辺から訪れた。

もちろん物忌みをしている綱は七日間、面会謝絶である。誰であろうと会うわけにはいかない。

「七日が明けないことには、人に会うことができないので、もう一日待って欲しいとお伝えしなさい」

綱は従者（すさ）にそう言った。

老女は、面会を断られると、

「せっかく私がこうして会いに来たのに許されぬとは……。恩を忘れるとはこういうことを言うのですよ」

と、言って泣き始めた。

その涙に従者が油断している隙に、綱の叔母は従者の横をするりと身軽に抜けて読経をしている部屋まで飛ぶようにして侵入していった。とても、老女の動きには思えないほどの機敏さだ。

「お養母上（ははうえ）！」

綱が老女を見てそう言った途端、形相が鬼に一変した。

「ふふふ、愚か者め。我が恨み晴らそうぞ！」

そう言うやいなや、着物を脱ぎおとして片腕の鬼女が踊り出た。

綱の眼前の朱櫃を奪い、蓋を荒々しく投げ捨てて中から腕を取り出した。

綱はすぐさま鬼女に斬りつけた。

老女は、見覚えのある鬼女、いや茨木童子であった。

「茨木童子だな！」

「邪魔だてするな」

と鬼女が言うが、すでに顔も言い方も本来の男のものとなっている。綱の剣は、ひらりひらりと体をかわす茨木童子を必死に捉えようとしている。

「性懲（しょうこ）りもなくまた現れおって」

やっとのことで綱の剣が茨木童子の体の上部に触れた。ちょうど首のあたりだ。

「えい！」という気合のもとに渾身の力を振り絞ると、刀は横一文字の軌跡を描いた。ついに茨木童子の首と胴が離れた。

《仕留（しと）めたり……》

ところが、茨木童子が腕を持って屋根の破風（はふ）を突き破り逃げ去って行く。その後ろ姿には首が、ちゃんと付いているではないか。仕留めたと思った首は何とよくみると大きな瓜であった。

「うぬ！たばかりよって！」

一部始終を見ていた僧侶たちは、恐怖のあまり腰を抜かしてしまっていた。

綱の屋敷から茨木童子が腕を取り返して間もなく、今度は頼光が襲われた。

茨木童子事件のあと、頼光は「瘧病（ぎやくびょう）」という一種のマラリアのような病気にかかった。平安時代とは、瘧病のような疫病が、よく猖獗を極めた時代であった。四天王が必死で付きっきりの看病をした結果、やっと高熱も下がり落ち着いてきた。

もう快癒も近いといったある夜、綱たち四天王が安心して別棟で仮眠をとっていたところ、頼光の寝所（しんじょ）から大きな声が聞こえてきた。

「何だお前は！ 源頼光と知ってのことか！」

「もとより知つてのことだ頼光！ 覚悟せい」

そう怒号がしたかと思うと激しい鐸（つば）ぜり合いの音が続いた。

頼光の寝室に僧形の大男が忍び込み、そっと枕元に立ち、まさに剣を蒲団越しに差し貫こうとしたが、間一髪のところで、危険を察知した頼光は、名刀『膝丸（ひざまる）』を抜いて闘っていたのである。

薄暗い中で、頼光の剣が『ひゅっ』と素早い音を立てた。

確かな手応えがあった。

「殿！」

駆けつけた四天王が明かりをもって来た時には、その大男は姿を消していた。しかし、床を見ると頼光に斬られて流した血と思われる跡が点々と外へ続いていた。血痕は妻戸から竈子の方へ点々としていた。四天王がそれぞれ手に明かりを携えて狠犬よろしく、その血の行方を辿ると、それは北野の森の中に続いていた。

さらに、辿ると血痕は塚のような洞窟の中に呑み込まれていた。

だからといって、洞窟の中に迂闊（うかつ）に入ることはできない。逆襲に遭うかもしれないのだ。勇気と無謀とは違うのだ。

「このような洞窟に住むのは、『土蜘蛛』に相違ない」

碓井貞光が推理して言った。

土蜘蛛とは、律令制に従わない、いわば『まつろわぬ民』の蔑称で、確かにこのような洞窟を住居としていた。

暗黒の中で、貞光の声が目標となったのか、突然洞窟から僧形の大男が声を出した貞光めがけて斬りかかってきた。かなり大きな黒い塊のシルエットが、ぼんやりと暗闇の中に浮かび上がった。

貞光が襲われたので、傍らにいた卜部季武が貞光に加勢した。土蜘蛛は手ごわく、さすがの貞光も季武も苦戦した。

接近戦の上に、この暗がりでは綱と公時も争いに加わることができない。手を出せば、同士討ちとなってしまうからだ。

なかなか決着がつかなかった。一計を案じた坂田公時が、土蜘蛛に飛びつき、柔とも相撲とも名状しがたい技で土蜘蛛を投げ飛ばした。

土蜘蛛は毬のように宙を舞い、受け身をした。したがって、それほど身体的な衝撃を受けたはずはなかったのであるが、いかにも心に動搖が生じた様子で動きがとまっている。公時の使った技が、土蜘蛛の心に衝撃を与えたのだ。

「おぬし、金時ではないか」

暗くてよくわからなかつたが、公時にも覚えのある声と体躯であった。

「そういうお前は、矢平か！」

公時はもとは金時と書いた。つまり、あの有名な箱根の足柄山の金太郎である。出産の際、金時の母親は赤竜が胎内に入る夢を見た。その結果、生まれた金時は、全身真っ赤で頭ばかり

り大きい異形の姿であった。母親は驚き、村人の勧めもあって、ことあろうにわが子を足柄峠に捨てた。

山の老婆、山姥（やまうば）に拾われた後、金太郎は移動途中の『山の民』に預けられ育てられたのである。このとき『山の民』は、関白道隆の子、道宗を首領とした山人集団であった。道宗自身も道隆の乱行（らんぎょう）によって出来た子であったので山に捨てられたという過去をもっていた。

しかし、捨てられたといつても、かりにも当時、ときめく関白道隆の子である。養育する費用と隨行し育てる者が、密かに生涯続いてあてがわれた。そういう点では金時とは事情が異なる。

山の民はこの道宗という貴種をかついで簗（す）や木地（きじ）づくり、採鉱をする技術集団を形成していた。また、自己防衛のために武道にも励んだ。

山の民は漂泊移動は激しく、本来は定住することはない。ところが、足柄峠付近は、鉱山資源も豊富だったので道宗は、ここを本拠地とし居着くことにした。そんな時に、金時が山姥に連れて来られたのだった。金時の赤い体も次第に普通になり、大きな頭も体の成長とともに目立たなくなってしまった。そして、何よりも金時の文武に秀でた才能が道宗の目を引いたのだった。

道宗は金時を山の民に終わらせる 것을惜しんだ。

そこへ、たまたま上総の国司を終わらせて京に戻る途中の頼光が足柄山に立ち寄ったので、道宗は頼光に金時の将来を託したのである。天延四年（976年）、頼光二十八歳のことであった。

頼光が、坂田金時を召し抱えるようになった経緯（いきさつ）は次のようなものであった。

相模の竹ノ下から、相模の関本へ向かう途中に足柄峠がある。峠に頼光一行が通りかかった時、すでに家来となっていた渡辺綱が叫んだ。

「足柄峠に煙りが幾筋も見えまする」

なるほど、煙りが見え、火の粉も舞い上がって赤い煙りとなっている。

《あの火の粉はタタラに違いない》

古代の精錬法であるタタラは、鞴（ふいご）を使って火を強くし鉄の純度を上げていく方法をとる。頼光が見たところでは、火の粉はタタラから出たものだと確信できた。やはり頼光もそういう環境で育ったからである。

赤い煙りは頼光たちのいるところから、やや離れたところに見えたが、とにかく急な山道で一休みしたかったのと、少し早いが宿をとってもよい時間であったので、赤い煙りのあがる方角へ頼光たちは進んだ。

集落に着くと、どうも雰囲気が怪しい。

というのは、頼光一行を見る目が女も子供も明らかによそ者を拒絶するようなものだったからである。

男たちの中には、鞴の踏みすぎで足を悪くしたのか片足を引きずっている者もいる。また、

炉の具合を見るために目を酷使したのか、片目がつぶれたようになっている者もいる。頼光が案内を乞うて、しばらくすると道宗自らが出てきた。

「お武家様でございますな。名乗っていただこう」

「失礼つかまつりました。源頼光と申すもの。上総の国司の勤めを終えて京に帰る者にござる。宿を頂戴したく存ずる」

「そうであったか。京に帰るとは、ゆかしいのう。上総の様子でもお聞かせいただきたい」大きな広間に通された。

「藤原道宗と申すものです」

頼光は驚いた。道宗のことは頼光ぐらいの地位の者でも知っていた。東国へ行ったとは聞いていたが、まさか足柄にいて、目の前にいるのがそうであるとは…。山の民であるとはいっても、身分は頼光と段違いである。

自然に座ったまま後ずさりして、叩頭（こうとう）した。道宗は普段は、足柄平太夫と名乗っている。頼光が源満仲の子であることは道宗も知っていて、すぐに本名を名乗ったわけである。道宗にとっても道長の家札である頼光は、久しぶりの賓客である。

京や上総の話を聞いて道宗は満悦した。

頼光がふと、道宗の傍らにいる赤ら顔の体格のよい若者をほれぼれと眺めていると、道宗は待ってましたとばかりに、切りだした。

「どうです、頼光殿。この金時をおぬしの家来に召し抱えてはくださらんか」

「これほどの偉丈夫をわたくしのやうなものにお任せくださっても…」

「かねがね、この金時をこんな山奥に留めておいてはいけないと考えておった。こんな機会はめったにない。どうか京で思いきり働かせてくだされ。捨て童子で毛並みはよくないが、怪力と知力は誰にも劣りはせん」

確かに、盛り上がった胸や肩の筋肉と腕の太さを見ると、熊や猪と充分闘うことができそうである。

こうして、頼光は金時を家来にして京にもどった。金時をひとまず、近江の坂田郡朝妻の武家の養子にして、坂田姓を名乗らせ金時も公時と名前を変えさせた。

こうやって聞くと、頼光は何と気風（きっぷ）のよい太っ腹の武士のように思えるが、この時頼光は、坂田公時に惚れこんだだけで雇い入れたわけではなかった。

『受領は倒（たお）るるところ、土をもつかめ』と言われた時代である。

足柄峠の『タタラ』を将来は我が物にしようと目論（もくろ）んだのである。坂田公時と主従の関係を結んで金時を籠絡し、いつかは足柄山征服の足掛かりにしようとしたにすぎない。

頼光を襲った土蜘蛛は、実は、この足柄峠で金時と一緒に働いた仲間である。力自慢に金時と相撲をとったことが何度もある。公時が偶然にも使った格闘技が、土蜘蛛に昔の関係を思い出させた。土蜘蛛の身体が覚えていたのである。

『金時』の名を口にし、記憶をたどっているうちに、土蜘蛛に隙ができた。

その瞬間、綱は出かける時に頼光から預かった『膝丸』で土蜘蛛の背を袈裟懸（けさが）けに斬った。崩れ落ちる土蜘蛛が呻きながら言った。

「後ろから斬るとは卑怯なり」

確かにそうだった。矢平にそう言われて、綱は反射的に土蜘蛛を背後から斬ったことを恥じた。

断末魔の土蜘蛛を公時は抱き起こした。いたたまれぬ気持ちの公時は聞いた。

「なぜ、頼光様をねらった」

「わかっているだろうおぬしには……」

そう言った通り、首をうなだらせて動かなくなってしまった。

矢平は、同じ山人であった公時に、頼光を襲った理由がわかるだろうと言った。ところが、すでに頼光配下に加わって久しい公時には、なぜなのか分からなかった。

廟堂の王化政策は、いよいよ箱根の足柄峠にも及んできていた。

しだいに、廟堂の勢力範囲が全国へと広がっていったのである。そこで、廟堂の動きを探るべく道宗は、矢平を京へ派遣した。

京に近い『まつろわぬ民』の部族である土蜘蛛は、茨木童子、鬼同丸の事件を知って、自分たちの身の危険を感じ始めていた。闇のネットワークとでも言おうか、土蜘蛛と道宗の『山の民』とが、連絡を取り合った。そこで、矢平が土蜘蛛の仲間に加わったのである。

頼光が瘧病で弱っているので、討ちとる絶好の機会と土蜘蛛たちは、にらんだ。そこで客分として、身を寄せていた矢平が、その任務をかって出た。

侠客なら、さしづめ一宿一飯の恩義といったところだろうか。また、矢平は足柄山で頼光の顔を見ているので、頼光を襲うのに人まちがいをすることもない。

矢平は、金時が四天王の一人として頼光のもとにいることを知っているので、金時と鉢合わせをしないよう寝込みを襲った。襲撃に失敗して、配下の者が追ってはくるだろうと思っていたが、追っ手の中にいざ金時がいると分かって、動搖した。

あの竹を割ったような性格のなつかしい金時が、頼光の飼い犬となってしまっていることが残念でたまらなかった。

しかし、やはり会ってしまった。

矢平にとって、金時の刃（やいば）にかからなかつたことがせめてもの救いであった。綱が使った頼光の剣、『膝丸』は土蜘蛛を成敗したあと、『蜘蛛切』と呼ばれるようになったが、金時はその後、その刀を見るのも嫌がった。

土蜘蛛矢平に起こったことは、茨木童子の片腕切り落とし事件や鬼同丸斬り捨て事件と同様、山づたいに全国の山の民や山伏、大江山の鬼たちへと、闇のネットワークに乗って迅速に伝わった。山の民は、『服（まつろ）わぬ民』たちは、いよいよ警戒心を強め、廟堂も動きを急速に活発化していった。まさに両者は一触即発の状態となっていたのである。

## 第4章 池田中納言の姫失踪事件

源頼光は、内裏に足繁く参内したり、蔵人頭と連絡をとりあって精力的に行動し始めた。

司令塔は一条帝というよりも、藤原道長と蔵人頭、藤原行成であった。

折しも、京では貴族の姫君が誘拐される事件や放火が相次いでいた。廟堂の会議において喧々囂々（けんけんごうごう）たる意見がたたかわされた。

「京に不穏の動きあり、大元（おおもと）の酒呑童子を討つべし！」

「いや時期尚早！」

「茨木童子の所業（しょぎょう）、まさに挑発である。これを機に大江山攻略をいたさねば……」

「池田中納言国賢（くにたか）様の姫も酒呑童子に拐（かどわか）かされていると聞いておる。その救出のためにも酒呑童子を討つべきであろう！」

そう言われて、池田中納言は哀願するような目で皆を見回している。自分の娘のことだから、自分から朝議の議題にのぼらせることは憚（はばか）られた。

池田中納言は、国司時代に蓄えた金銀財宝で富貴の聞こえが高かった。その中納言に美貌の一人娘がいた。当然思いを寄せる貴族の子弟は数多く、婿選びが中納言とその奥方の嬉しい仕事であった。

その姫がある日の夕暮れ時に、突然失踪してしまい、池田中納言の屋敷は大騒ぎとなった。中納言の奥方は心配のあまり病床に伏してしまう有り様であった。

「京の隅から隅まで探すのじや。見つけたものには恩賞は思うがままで」必死の搜索も空しかった。

結局、人探しが最後に頼みとするところは陰陽師のところである。

この時、第一人者の陰陽師安倍晴明はあいにく播磨の国守として赴任してしまっていた。贅沢を言ってはおれず、池田中納言は神隠しにあった者を見つけ出すことでは評判の村岡正時（まさとき）と言う名の陰陽師に娘の搜索依頼をした。池田中納言の奥方は、床から跳ね起きて中納言とともに正時のところを訪れた。

正時の前では、池田中納言国賢は、中納言という肩書をかなぐり捨てた、ただの人の子の親になっていた。

「正時よ、私の一人娘を捜し出しておくれ。齢（よわい）は今年十三歳になる。乳母（めのと）や守役（もりやく）、女房たちにも言いかせて壊れ物にさわるよう大切に扱ってきた姫なのだ。縁の昇降にも付き添いがつき、強い風には人が屏風がわりになったくらいじや。そんな娘を拐かす不届き者がどこにいるのか教えておくれ。いま姫は無事なのか、そうじやないのか、どうなんだ、正時！」

中納言の目は血走っている。銭の袋をうずたかく積み上げて、正時の前へ差し出した。正時はこれを一瞥して、

「おまかせあれ。お占いします」

と、言って、筮竹（ぜいちく）を扇のよう開いては、数本ずつ繰（く）って、またばらすということを、くり返した。傍らにいる中納言と奥方には正時が何をやっているのか、さっぱりわからない。だが、こればかりは正時を信頼して任せるほかなかった。

『えい！』という気合のもとに正時は確信したように言った。

「姫君の行方がわかりました。丹波国大江山の鬼、酒呑童子のところでございます」

「生きているのかそれとも……」

池田中納言は『それとも』のあとに『死んでいるのか』と続けたかったが、そんな不吉なことは言えず、口ごもった。

「ご安心ください。お命に別状ありません。私の祈祷によってお命の安全は保証できましょ

うに」  
少々うさん臭く思いながらも、それを聞いて池田中納言は娘の命を助けたい一心で、銭の袋をさらに積み上げた。

正時は言い出しにくい様子で言った。

「命には別状ないのですが、操の方が……」

「ええい、それ以上申すでない。命さえあれば縁談には不自由せん」

確かにその通りかも知れない。池田中納言ほどの富貴と姫の美貌さえあれば、拐かされたことなど何でもないことかもしれないのだ。正時は、池田中納言が訪問する前に、すでに使役する式神に調べ上げさせて、娘の居場所はつきとめていた。筮竹など本当は必要としなかったが、銭の上乗せのために占うふりをしたのであった。

正時の言うとおり、池田中納言の姫を拐かしたのは酒呑童子であり、実行犯は茨木童子であつた。綱に片腕を斬り落とされても娘ひとり拐かすのは他愛もなかつた。

朝議が重ねられた。

左大臣道長が、意見が出尽くしたところで皆の意見をまとめるにして言う。

「帝の御威光を損なうような振る舞いは決して許されるものではありません。京から子女（しじよ）をさらっては、そばに侍らせる酒呑童子の所業はまことに言語道断。保昌、頼光、四天王を大江山に討伐に遣わすならば、平定も可能でしょう。ぜひ、この評定でこの議を決裁を仰ぎ、ご宣旨を賜りますよう」

帝は頷いて、

「左府（さふ）の言うとおりである。頼光は朕も頼りに思う武士（もののふ）じゃ。頼光を呼びなさい。朕からも話をしようぞ」

評定は、この帝の一言で決定した。

「おそれながら、すでに呼び寄せております」

道長は厳かに言った。

頼光が呼ばれた。頼光は御簾（みす）ごしに帝に對面した。

「頼光、すでにわかつておろうが丹波国大江山の酒呑童子を討伐して欲しい。朕が治める国には津々浦々まで鬼がおってはならぬ。國の治安を守るためにはお前の力が必要じゃ。退治

してはくれまいか」

頼光は畏まって勅命を受けた。

「有り難い仰せでございます。この頼光、身命を賭（と）して大江山討伐に向かわせていただきます」

一条の自分の屋敷に戻った頼光は、自分の屋敷にさっそく藤原保昌や四天王を呼んで、宣旨を伝え第一回目の作戦会議をもつことにした。

一同を前にして、頼光は厳肅な面持ちで言う。

「帝から御下命があった。大江山の酒呑童子を討伐せよとのことじや。もちろん囚われの池田中納言の姫君ほか多数の子女の救出に向かう。相手は鬼であるというが、人間じや。ただ、山に住んでいる者は、妙な武術を心得ておる。必勝を期して神仏の御加護にすがらなければなるまい。私と保昌は岩清水八幡、貞光と季武は熊野権現、綱と公時は住吉明神へ必勝祈願に行く。よいな」

「ははっ」

祈願に行くため、二回目の作戦会議は三日後とされた。

## 第5章 大江山討伐

再び頼光邸に集まった五人に向かって頼光は三日間のあいだに練った作戦案を披露した。「この討伐は人数が多過ぎてはならない。大江山に入る道には至るところに酒呑童子の配下のものが見張っておる。むしろ我々は、小人数の修行中の山伏姿で行く。表敬訪問ということで酒呑童子の屋敷に入り、酒好きの酒呑童子に酒をふるまって酔い潰れたところで首級を取る。どうじや」

茨木童子にすでに蔵人頭行成の屋敷で、大江山討伐の話を聞かれているだけに、その報告を受けた酒呑童子は警備を固めているにちがいない。正攻法では討伐はまず無理である。小人数で騙（だま）し討ちにするしかない。

「どうやって武器を運びます」

「山伏姿であるから、笈（おい）のなかにでも鎧甲（よろいかぶと）を隠しておけばよいであろう。刀も細工をして持って行くがよい」

「ははっ」

五人は口を揃えて返事をした。

頼光は緋緘（ひおど）しの鎧と、同じ毛の『獅子王』という甲、そして剣を笈の中に入れた。保昌も笈の中に腹巻、甲、短めにした薙刀（なぎなた）を入れ、綱は萌黄（もえぎ）の腹巻に甲、茨木童子を斬った『鬼切』を入れた。貞光、季武、公時も考案して腹巻、甲、剣を笈の中に入れ、他に火打ち石も用意した。雨具としての油紙は笈の上に取り付けた。

山伏姿に変装するのであるから、頭巾（ときん）をつけ、鈴掛（すずかけ）を着て、法螺貝（ほらがい）、金剛杖といったものを準備した。また、丸腰ではいざというときに困るの

で山伏として不自然でない程度の打刀（うちがたな）を帯びた。

準備万端、丹波国の大江山へと六人は旅立った。一応、外見は修験道を行う一団に見えた。

大江山が近くに見えた辺りで、頼光らは柴刈りの男に遭った。

「そこの山人よ。ちょっと尋ねるが、千丈嶽（せんじょうだけ）の鬼の岩屋はどこにあるのか教えてもらいたい」

山人は恐れた表情を顔に浮かばせた。

「あなた方は見たところ山伏のようじやが、あんな恐ろしいところへ行かない方がよいぞ。向こうへ行って帰ってきたものは村でもおらんからの」

「鬼が住むというその岩屋に届け物があるのじや。道筋を教えてほしい」

「今までいうのなら道を教えるが、おぬしたち、わしはどうなっても知らんぞ」

心配そうな面持ちで、その山人は地面に小枝で大江山の稜線を描き、鬼の岩屋まで行く道を頼光たちに教えた。

「かたじけない」

千丈嶽に近づくにつれ誰かに見張られているように感じた。藪の中、樹木の背後に見え隠れする人影……。

頼光は、大江山周辺には廟堂から討伐を助けるための間者（しのび）が、すでに放たれていると聞かされていた。しかし、道を教えてくれた芝刈りの男はどうも間者とは違う。もちろん、こちらの様子を窺っている人影も向こうから姿を現さない以上、それとは違うはずである。岩屋へ行く道がだんだん険しさをました。峰づたいにしばらく進んでいると、岩穴があつた。突然、中から声がした。

「もし！」

急な声に驚いて、保昌は後ずさりをして、もう少しで崖から落ちそうになった。岩穴の奥に柴葺（ぶ）きの小屋があつて、その中から三人の老人が出て来た。その一人が話かける。

「頼光様でござりますか」

「いかにも」

「お待ちしておりました」

「間者か」

「いかにも。酒呑童子の見張りがたくさんいたので、姿を現して名乗り出ることができませんでした」

「やはり、あの人影は見張りであったか……」

老人にしては声に張りがある。よく見てみると、若い間者が老人に変装しているのが分かった。他の二人もそのようだ。

六人とも暫時休憩することにして箸を降ろした。

竹筒に入っている水でそれぞれの者は喉を潤（うるお）した。

「鬼の岩屋はもうすぐでございます。酒呑童子は無類の酒好きですので、ここに用意しました丹後の酒を飲ませくださいまし。中にはしひ

痺れ薬が含まれておりますゆえ、あなたさま方は解毒の丸薬をあらかじめ飲んでおいてください。痺れ薬が効いたあと、退治するがよろしかろうと思います」

後の世に、この酒は鬼には毒となり人間には薬となる『神便鬼毒酒』と伝承された。頼光は『神便鬼毒酒（じんべんきどくしゅ）』と丸薬を受け取った。さらに、間者は不思議な感じのする鉄のついた星甲（ほしかぶと）を取り出して、説明し始めた。

「酒呑童子は不思議な靈剣をもっております。この星甲は『ひひいろかね』（特殊な鉄）で出来ており、酒呑童子のもつ靈剣と同じ鍛練がなされております。身を護るのであればこの星甲を身につけてくださいませ」

頼光は笈の中の持つて来た甲『獅子王』の上に星甲を重ねてしまい込んだ。

頼光たちは間者の一人に案内されながら、千丈嶽（せんじょうだけ）を登った。谷川に出たところで、間者と別れることになった。

間者は別れる際に、

「この川上をお上りください。十七歳くらいの娘が川で着物を洗っているでしょう。その娘はこちらが放つた間者の『傀儡女（くぐつめ）』でございます。名前は『百舌鳥（もず）』と申します」

と、言って、風のように去った。

『傀儡（くぐつ）』とは、操（あやつ）り人形を歌などに合わせて舞わせることを生業（なりわい）とし、各地を漂白する芸人であるが、もともとは王権に服わぬ民であり、時には忍者になることもあった。傀儡の女、すなわち『傀儡女（くぐつめ）』たちの中には遊女となったり、女忍者『くのいち』になる者もいた。

服わぬ民であるのなら、『百舌鳥』は、むしろ酒呑童子側についているはずだが、間者として権力側についていたのには理由があった。百舌鳥の父は公家であったのだ。

ある時、薬狩（くすりがり）に来た貴族の子弟の一人が、隠れ里の娘に手をつけた。これが、百舌鳥の父と母である。

隠れ里でそのまま父（てて）なし子として育てられ、百舌鳥は父を知らずに成長した。百舌鳥の母は、病弱であった。事情を知っている廟堂関係者が、酒呑童子攻略のために、百舌鳥を利用することを思いついた。密かに手を回して、その母に有能な薬師（くすし）をつけるという条件で、百舌鳥にスパイの任務につくことを承諾させた。隠れ里の『傀儡』集団に属していた傀儡女の百舌鳥が、酒呑童を頼って、身を寄せてきても、大江山では別段、疑う者はいなかった。

頼光にとっても、警戒が厳重な潜入しにくい酒呑童子の本拠を突くのに、百舌鳥という味方は頼ってもないものだった。

頼光たちが、川を石や岩を手掛かりに登つて行くと、石や岩が赤くなっていた。おそらく、鉄穴流（かんななが）しのせいであろう。

古代の製鉄では砂鉄を埋蔵する山の一角を掘り崩しては川に流し、樋のなかに導いて砂鉄をより分けるという方法が取られていた。その鉄が岩石に付着して酸化し、赤くなつてい

るのであった。

里の者は大江山の鬼を恐れるあまり、岩が赤いのは、大江山の鬼が、さらってきた人間を食べるために切り刻む。そのときに出た血で汚れた着物を川で洗うからだと噂した。

そのまま川を登っていくと、鍬や笊（ざる）で砂鉄を掬（すく）っている何人かの娘たちに出会った。

娘たちは一斉に頼光たちを見て驚いた。他者（よそもの）を見るのがよほど珍しかったようだ。頼光は途中で出会った柴刈りの言った言葉を思い出した。

「村人の中でも、鬼の岩屋へ行った者で帰って来た者はいねえ」

実は、帰る者がいないのは至極当然であった。鬼の岩屋に行ってみようなどというは仕事にあぶれた者たちだ。そういう者たちが、この鬼の岩屋へ来て見ると皆が忙しそうに、また生き生きと働いているのを見た。人を食う鬼などおらず、何も恐ろしいことはなかった。

働くと思えばいくらでも仕事はある。身分の上下などもない。一生懸命そこで働きさえすれば、それまでよりもずっとよい暮らしを保障された。だから、帰る者はいるはずがなかった。

娘たちの一人が頼光たちの出現を知らせに走った。他者を見たらそうしろと言い渡されているのであろう。

《この娘たちはさらわれて、このように働かされているのだな。さて、どの娘が『傀儡女』百舌鳥なのか、どれも皆十七歳ほどの年頃のようであるが……》

すると一人だけ顔つきに驚きの様子を示していない娘がいた。頼光がじっと見つめると目が《お待ちしておりました》と答えているようだ。

《あの娘が百舌鳥だな》

と、頼光は思った。

間もなく十人ほど男たちがやってきた。熱い炉にかかりつきりになっているためか、上半身は裸である。また、強い火にあてられた体は汗と油と煤で赤く腫れあがったようになっていた。下半身には獸皮の猿股（さるまた）をはいている。顔も体と同じように赤く、髪などは伸ばし放題で、やはり火であぶられているせいか一様に縮れている。なるほど人々の思い描く鬼の姿そのものだと頼光は思った。

男たちは頼光一行をぐるっと囲み、咎（とが）めるように口々に言う。

「お前たち、何をしに来た。ここはよそ者が来るところじゃねえ」

「早く帰ったほうが、身のためだ」

頼光は落ち着いた感じで言う。

「いえ、別に怪しいものではありません。酒呑童子様に挨拶に参ったまでのこと。我ら、修験道を修行する者で役行者様の流れをくむものにございます」

役小角の名前を聞いて男たちは、はつとしたような顔になった。

役行者（えんのぎょうじや）は、またの名を役小角（えんのおづぬ）という。葛城山の一言主（ひとことぬし）の予言や神託を担（にな）う神官の家系に生まれ、雑密の修法『孔雀明

『王経法』をおさめて神通力で鬼神を使役したという。役小角はたしかに修験道の祖であるが、一方、やはり葛城山、吉野、熊野の山系に居住していた産鉄族の首領でもあった。そして、全国の『服わぬ山人たち』の神格的存在として崇められていた。役小角は、ときの廟堂の首班、藤原不比等（ふひと）の策略にかかって自分の弟子の韓国連広足（からむこうのむらじひろたり）の讒言（ざんげん）によって捕らえられ、伊豆に流された。

『役小角捕らわる』の報は矢のような早さで全国の山人たちに伝わっていった。そして、小角の救出をせんがため、国内の山人が一斉蜂起する動きがあるとの情報が、廟堂に飛び込んだ。

朝廷は震えあがった。当然のように即刻、役小角は釈放された。そうでなければ未曾有の内乱がこの日本で起こっていたかもしれない。

頼光はそんな役小角の名を口にしたのである。

「そうであったか、役行者様にかかわる者たちか。して、どこから来た者か」  
役小角の名前を咄嗟（とっさ）の機転で出したのであるが、思わぬ手応えがあつて、頼光は、むしろ内心驚いていた。そして、どこから来たのかを聞かれて、もう一つの嘘を思いついた。

「高野山から参った」

「すると弘法大師様の……」

高野山といえば金剛峰寺、金剛峰寺といえば弘法大師空海である。

「そのとおりでござる。積もる話もございますゆえ、是非とも酒呑童子、いやお館様にお会いしあります。ほれこのように酒を持参いたし、心ばかりの土産も持参いたしました」

そう言って小さな酒樽を持ち上げた。

「ではお待ちを」

弘法大師空海はもちろん高野山に金剛峰寺を建て純密（じゅんみつ）を伝えた真言宗の開祖であるのだが、実は空海にはもうひとつの顔がある。それは、役小角同様、修験道や産鉄族と大きく係わる鉱山師の棟梁としての顔である。金銀、銅のほかに、とくに丹（に）つまり水銀の鉱脈を採掘する日本の第一人者であった。

だから、大江山の『鬼たち』産鉄族にとって空海は、役小角とともに雲上の人である。偉大な空海と役小角の名に幻惑されて、大江山の鬼たちは、頼光たちをすっかり信用してしまった。

川べりでしばらく待たされた後、頼光一行は酒呑童子の屋敷まで丁寧に案内された。

酒呑童子の屋敷を見るなり、頼光たちはあっと息を飲んだ。

聳え立つ城壁はすべて鉄で出来ていたし、城壁には瑠璃（るり）で装飾が施されていた。窓には宝玉の簾がかかっている。屋敷の屋根は伽藍で葺（ふ）かれるような瓦が使われていたが、瓦の下はやはり鉄で覆われているのだろう。屋敷というよりも要塞である。

見張りが赤ら顔で鉄棒をもち、鬼さながらの様子で立っていた。

重そうに開けられた鉄門を通過すると、両脇の門番は前を向いたまま目だけで頼光たちを追った。

玄関に着くと、逆にすっきりとした感じの若侍が応対に出てきた。

「ようこそおいでくださいました。弘法大師様のゆかりの方々と聞いて、お館様に取り次いだところ、さっそくお会いしたいとのお達しでございました。大師さまには、お館さまと私どもが比叡山からこちらの大江山に移る際に大変世話になりました。さあ、どうぞお上がりください。長旅でお疲れでしょうに。ろくな持て成しもできませんが、どうぞごゆるりと」

娘たちが足を洗う桶をもってきて、頼光たちの足を洗う。先程川で会った娘たちとは違う顔触れだ。

《いったい、どのくらいの娘たちをさらってきたのだろう》

頼光がそう思っていると、娘が筈を預かろうとした。

「大事な経典が入っているゆえ、自ら携える。結構だ！」

と、言って断った。他の者たちも娘たちに、断るそぶりをした。

預けている間に探られて、甲や刀が見つかっては元も子もない。

酒呑童子の居間までは、長い回廊であった。幾つの部屋を通り過ぎたであろうか。やつと奥の院とでもいうべき部屋にたどり着いた。六人は部屋の天井絵や襖絵の龍虎の素晴らしいに驚嘆した。塗り壁はすべて金箔が施してあるではないか。

《竜宮城じや》

皆そう思った。

何やら初めて嗅ぐ香が焚かれていた。

座ってしばらくすると若侍がうやうやしく叩頭（こうとう）しながら言う。

「お館様のおなりでございます」

見ると女たちも同じように叩頭している。頼光たちもそれに習った。

赤い着物をきた童女二人がまず歩いて入ってきて、その数歩あとに小姓に囲まれた酒呑童子が入ってきた。堂々としていて、背も高く恰幅もよい。大きな均整のとれた体つきで、鼻筋の通った美男である。

髪は前髪を切りそろえたおかっぱのような禿（かむろ）であり、顔はやはり赤く、年齢は若いようでもあり、そうでもないような感じだ。

着物はきらびやかな大格子模様の絹織物を羽織り、紅の袴をはいていた。酒呑童子は座つて脇息（きょうそく）に肘をあてて、頼光たちに機嫌よさそうに言った。

「よくぞ、訪ねてくださった。大師様にはひとかたならぬ世話になりました。高野山で入定されてからもう何年でしょう。大師様からは、鉄（くろがね）や水銀（みずがね）の見つけ方を教えて頂きました。ところで、皆様方は高野山から直接ここへ……？」

「高野山を出て、役行者様が修行されたという山々を訪ね歩き、大峰山に山籠もりをしました。三月（みつき）ほど籠もって修行したあと、都見物にでもと大峰山を出発いたしました。ところが、途中でお館様にご挨拶をと、思いつきました。大江山のお館様のことは大師様より聞き及んでおりました。山陰道を迷いながらも、このように立ち寄らせていただいた次第でございます。これも大師様や役行者様のお引き合せでしょう」

頼光は、酒呑童子の機嫌をとるために、念を入れて、また空海と役小角を引き合いに出した。

「役小角様は我らの崇め奉るお人よ。行者様なくしては修驗道も孔雀明王經（くじやくみよ うおうきょう）も密教もございますまい。今の我ら山の民の大部分は、王権に支配され、懷柔されてなきなものになり下がっているが、古（いにしえ）に溯（さかのぼ）れば、大和王権よりも大きな王国、丹後王国を築いておりました。役小角様は元はと言えば葛城氏。わしの出た越後の祖先と同じものでござる。だから、わしは、こうして丹後王国を再興しようと頑張っておるのですよ」

酒呑童子はそう言いながら、あらためて反骨の炎を燃やしていた。

ぽんぽんと手を叩くと、酒宴の用意がなされた。膳を運ぶのはどれをとっても、まばゆいばかりの美しい姫たちであった。その中に、頼光は、あの『百舌鳥』がいるのを見逃さなかつた。

《折を見て、話さねば……》

姫らが頼光たちに盃に酒を注いだあと、酒呑童子は快活に言う。

「久方ぶりの来客じや。今宵は大いに飲みあかそうではないか」

その言葉がそのまま乾杯の音頭となって皆は盃の酒を飲み干した。

酒呑童子は飲むとますます饒舌になった。

機嫌のよいところを見計らって頼光はきりだした。

「高野山で醸造した酒を我ら持参しております。靈験あらたかな水を使った神酒です。ご御賞味くださいませ」

確かに神酒ではある。その名も正確には『神便鬼毒酒』というが……。計画通り頼光たちは、すでに解毒の丸薬を隙をみて服用していた。

「おお、そうか。これはありがたい。われは丹後より。ここしばらく外に出ていないゆえ、そのような酒を味わうことがなかった。有り難いことよ。我らも不老長寿の酒を別に用意してある」

頼光は緊張した。

《もしや疑っているのでは。同じように我らに毒を盛るつもりか……》

姫たちが恭（うやうや）しく運んできた膳に載っている長い柄の銚子は何の変哲もなさそうである。だが、小皿に盛ってある赤い粉末はいかにも妙だった。

怪訝（けげん）そうな頼光を見て酒呑童子は言う。

「ご心配めさるな。辰砂（しんしゃ）から作った軽粉（けいふん）じや。仙薬じやて」と、酒呑童子はあっけらかんに言った。

辰砂は丹つまり鮮紅色をした赤い砂であるので朱砂とも丹砂とも言われた。辰砂からとれた水銀を塩と『にがり』と赤土をまぜて焼いて作ったのが軽粉である。

室町時代には軽粉は梅毒に効くとして珍重され、また赤色の顔料、塗料、鍍金、黄金の精錬にも使われた。したがって、辰砂は金よりも貴重とされたほどであった。

有機水銀は強い毒性があるが、無機水銀は毒性はなく少量を服用すると不老長寿の仙薬

になると言っていた。

頼光に不老長寿の薬として出された赤い粉末はこれであった。したがって、別に毒でも何でもない。確かに、酒呑童子の心ゆくもてなしと考えてよかつた。

辰砂は酒に混ぜ合わされると血を流し込んだような色になる。後世、世の人はこの時に出された酒は、鬼が人を殺して絞った血であるなどと誤って言い伝えている。

肴（さかな）には山鳥のものもや猪の肉が出された。出されたものに躊躇していると、酒呑童子は、わざと気づいたようにして言う。

「そうであったな。あなた方は僧侶であったの。食えなんだら残しておいて構わんよ」

頼光は、酒肴（しゅこう）を食べないことで酒呑童子が機嫌を損ねて『神便鬼毒酒』を飲まなくなってしまうのを懸念した。現に、まだ頼光が差し出した『神便鬼毒酒』を飲まず、自分のところの酒ばかりを飲んでいるのだ。

頼光は、腰の打刀をすりと抜いて、

「自分が料理していただきましょう」

と、言いながら、猪の肉をえぐりとて食べた。隣に座っていた綱も、同じようにした。

酒呑童子はこの様子を見て、

「ほう、僧であるのにこれは奇異な。戒めはよいのか」

頼光は機転をきかした。

「いえ心配には及びません。仏教には布施という教えがございます。出家者たるもの信者の喜捨を得て生活をせねばなりません。布施としてこの食事をいただくわけです。この山鳥も猪も私も同じこの世に生を享けどちらがどちらを食らってもかまわないので。『食う』は『空（くう）』に通じ、我的体もこの肉もみな仏身でございますゆえ……」

それを聞いて、酒呑童子は感服したようであった。

「実はあなたがたが僧侶かどうか疑っていたのだ。肉を出したのはそれを確かめるためであった。まして、刀など出して舌鼓（したづみ）を打って食べるものだから武士ではないかと、余計に疑った。しかし、その申されようは御坊（ごぼう）に間違いなしじゃ。失礼つかまつた」

ぽんと手をたたくと、別の膳が出てきた。そして、やっと酒呑童子は『神便鬼毒酒』を注（つ）いた盃を飲んだ。

もちろん頼光たちもその酒を飲み大いに歌い騒いだ。解毒剤が間違なく毒を中和してくれる。座の皆の酔いがまわってきたところで、酌をするために座をまわってきた百舌鳥と話をすることに成功した。

「やっと話せるな。どうすれば……」

「しっ！お声が高うございます」

頼光は少し声を落として言う。

「どういう手筈（てはず）になっておるのだ」

「はい。酒呑童子は酩酊すると、この奥の部屋に引っ込みます。機嫌良く、随分と呑んでい

るようですので、じきに、そうなるでしょう。その頃には痺れ薬もまわってきます。そこを見計らって斬りつけてください。常に身辺を警護しているのは、星熊童子、熊童子、虎熊童子、金童子という酒呑童子の『四天王』でございます。この四天王は手ごわいのでお気をつけください。でも今宵は、酒呑童子の許しが出で珍しく酒を呑んでいますゆえ、討ちやすいでしょう。しかも、酒呑童子の右腕、茨木童子は出掛けっていて、まだ帰ってきておりません。茨木童子がこの館に戻ってくるまでに決行を……」

「よし、わかった」

そういう会話をしているうちに、酒呑童子はいい気持ちになって、手鈴を大きく鳴らし、頼光に告げた。

「今、この女たち以外に私が寵愛する女たちを呼んだ。酌をさせよう」

出て来たのは池田中納言の娘であった。また、美人で評判だった花園の姫君も一緒である。

虎熊童子が急に上半身を脱いで踊りだした。見るところそれは、田楽踊りである。くしゃくしゃの髪と太い二の腕、毛深い胸毛の男の踊りである。きれいな娘たちが踊ればいいのにと最初頼光一同は思ったが、これがなかなか、素晴らしい跳躍が見られる見事な踊りであった。酒呑童子はよほど酒がうまいのか、興に乗ったのか、身の上話をし始めた。

「さきほど申したとおり、私は越後の生まれだ。母親の腹に二年ほどいたゆえ生まれた時はすでに歯が生えておった。そんな子は山に捨てられるか、寺に預けられる定めよ。だから、わしは近くの寺に入れられた。すると、わしが言うのも変だが、女子（おなご）に妙に好かれての。やきもちを妬いた坊主たちにいやがらせをうけたんじや。たまらなくなつて和尚に頼んで比叡山に修行に行きたいと願い出たんじや。比叡山は最澄様のいらっしゃる立派な伽藍じやからそんなひどい事はあるまいと思うての。ところが最澄様がいくらえらなくても、下っ端の坊主はどこでも一緒じや。また嫌なことが続いた。数人でわしを袋だたきをしたのも度々じやった。悩んでいたところ、ちょうど最澄様の使いで空海様のところへ行ったのよ。空海様に会うと、何と不思議なことにわしのことはすでにご存じじやった。空海様は、お前は皆とは違う運命を背負っているとおっしゃるのよ。お前の血筋を考えるとおっしゃった。最初は狐につままれた感じよ」

実は、最澄が修行僧を使いに出すと空海に言ってきたとき、空海は酒呑童子を指名したのだった。

「空海様の話によると、私の先祖は越後の海人族（あまぞく）の王だったそうじや。越後の海人族と丹後王国の海人族とは同族だそうじや。大江山は大和王権によって支配をうけてはおったが、細々と命脈を保っておったのよ。空海様は、大江山には鉄と辰砂があるとおっしゃられての。大和王権が侵食してきた時、御先祖様は、みすみす取られるくらいなら、鉱山を埋めてしまえといって埋めてしまったのよ。だから空海様は、それを掘り起こして、蓄財し丹後王国を再興せよとの仰せじやった」

空海はその頃、四国地方の鉱山開発に忙しかった。水銀の採れる高野山に本拠をかまえてからは、日本海沿岸までは手が回らなくなつた。それならばということで、血筋の確かな酒

呑童子に大江山を任せたかったのである。

「わしはだから頑張って働いた。こうして大きゅうなった。王国とまではいかないが、少しは近づいたと思うておる。それを朝廷や都の連中はわしを鬼扱いにして支配下におこうとするのじゃ。律令とやらでわしたちを縛ろうとする。いったい誰のものなんじや律令というのは。わしら民のものじやないんかね。鉱山を先祖が埋めてしまったので、最初は鉄山としてあまり利用価値がないと大和王権は検分して、そう思った。だから、朝廷は最初は自分たちが切り拓（ひら）いたところは、自分たちのものにしてよいという御触（おふ）れじやつた。だから一生懸命働いたのよ。ところがじや。わしらが興した結果、鉄山が価値のあるものだということが分かると、一転して朝廷は鉄山を召し上げるという……。律令に『廟堂によって公のものにすると評価されたものは公に収めるべし』と書いてあるというのがその理由じやそうな。律令っていうのは、朝廷に都合の良いように、解釈するもんじやな。だからわしは徹底的に反抗してきた。こういうのを世間じや『服わぬ民』っていうそうじやないか」 そう言いながら、酌をしている池田中納言の姫を顎で指し示して、

「その姫は、茨木童子がさらってきた娘じや。こんな山では女子（おなご）の働き手が少のうての。父御（ててご）、母御（ははご）には悪いとは思うが、炊事や洗濯、川で砂鉄を掬（すくう）には必要なんじや。まあ、身分のある姫は酌をしてもらったり按摩をさせてはおるが、それ相応の暮らしはさせておるつもりじや。宮廷の暮らし以上にな。姫たちに『帰りたいか』と聞くと、『ここでの暮らしに慣れて満足しているので都に帰りたくない』という。確かによいベベを着て、軽粉から作った白粉（おしろい）をつけ、銅を磨いた鏡はあるし、韓国（からくに）から船で運ばれた美しゅうて珍しい物を与えられれば都の退屈な生活には戻りたくなからうて。それに都の腰抜けにはない大江山の男たちの逞しいこと逞しいこと……」

鬼の四天王がにやにやしている。

そして、酒呑童子は、

「さて、おもしろいものをお見せいたそう」

と、言って簾と格子を童女に上げさせた。

すると、何と大きな庭園が頼光たちの眼前に躍り出た。

## 第6章 酒呑童子無残

頼光たちは啞然とした。

というのは四つに区分けされた庭のそれぞれが、春夏秋冬を表して、春の桜、夏の蛍、秋の紅葉、冬の雪景色が一望のもとに見ることができたのである。

《今は晩秋なのに、あの春の桜や夏の蛍は本物なのだろうか……》

頼光は不思議な気持ちでいっぱいになった。《どんな富裕な貴族でさえ、今を時めく道長でもこうはいくまい。やはり鉄（くろがね）や水銀（みずがね）は大きな財をもたらすもの

じやわい》

頼光の隣に座っていた渡辺綱は、素直にそう思った。

それぞれの四季の庭に、やはりそれぞれの季節に合わせた衣装を着た娘たちが、現れ出てきた。楽曲に合わせて、娘たちの踊りが始まった。その艶やかさ、美しさはたとえようもない。

すっかり豪奢な雰囲気にのまれた頼光たちは、うっかり討伐のことなど忘れそうになった。すると、百舌鳥の強いまなざしに気づき、頼光は夢心地から目を覚ました。頼光は、喝を入れるために自分の頬を挟むようにしてぴしゃりと叩いた。

《酒呑童子、この宴も今宵限りと知れ！》

頼光は闘志をふつふつと沸き立たせた。しかし、その闘志の多くはむしろ嫉妬からくることに頼光自身、気づいていなかった。何への嫉妬か……。

それは富にたいする嫉妬である。富貴な者は、自分以上に富貴な者に対して猛烈な嫉妬を抱く。

宫廷と見まがうほどの、いやそれ以上の栄華をほこる酒呑童子。

ところが、頼光以上に酒呑童子の富を狂うように嫉妬したのは、大江山討伐が行われた長徳元年（995）に左大臣になりたての道長であった。討伐の日は同じ年の十一月一日であった。頼光四十八歳、道長三十歳であった。

この時、廟堂の頂点に立っているのはもちろん一条帝であるが、政治の首班は藤原氏の筆頭、藤原道長である。代々鉄資源を押さえてきた藤原氏は当然、大江山の価値を十分知っていた。権力が酒呑童子の存在を許しておくはずはないのだ。今度の大江山討伐の絵図を描いたのは富と権力を追求する道長と頼光、そして蔵人頭行成であった。

「それでも茨木童子は帰りが遅いのう。都へまた女子（おなご）でも誘拐（さらい）に行つたのであろうが、先頃は、鬼同丸の仇をとるとかなんとか言って渡辺綱という武者を襲ったはよいが、不覚をとつて腕を斬り取られた。そうしたら、茨木童子は意地になって、腕を取り返してきよった。取れた腕などひつつきようもないのにのう。まあ、勇ましいのもわしの若いころにそっくりじやて。はっはっはっ」

酔った酒呑童子が、茨木童子の名を口にした。その名を聞くと、頼光と綱は、かつと頭に血をのぼらせた。討伐決行の心が逸（はや）る。百舌鳥が言うように茨木童子が戻ってくる前に決着をつけねばならない。

するとその時、かなり酔いがまわった飲み癖のわるい『金童子』が箸を使って戯れに、

「この刃（やいば）を受けてみよ」

と、言いながら綱を斬るしぐさをした。

綱は金童子の悪ふざけに決まっているので、箸など体に触れさせれば良かったのだ。それが、襲撃の機会をねらって心が臨戦態勢になっていた上に、虚を突かれたので作為も思いのままにならず、反射的にひらりと体を一回転してかわしてしまった。

酒呑童子は、『おや？』という顔をした。

「おぬし、身のかわしようが、ただの僧ではないな。何者だ」

綱は少しも慌（あわ）てず、

「これは不思議な仰せられようでございますな。仏道ばかりでなく私共、修驗道を心得ております。役小角の流れをくみ、高野山での修行を経て、このように獸道を歩き、山野を宿にする者が自然に身を軽くする術を会得するのも道理でございましょう」

「うむ……」

まだ半信半疑の酒呑童子に、坂田公時が口を開いた。

「わたしは異形（いぎょう）で生まれたゆえ、山に捨てられ老婆に拾われて獸とともに育ちました。自然に猿の身のこなし、鹿の跳躍などは身につき、ほれこのように」

猿の真似をし、ぴょんぴょん跳ねる様は一同を笑いに誘った。

坂田の機転でいっぺんに座が和（なご）んだ。

「お許しくだされ。これが山に住む者の性（さが）でござる。まして、茨木童子の話では源頼光が攻めてくるというので警戒していたのだ。酔うてても頭の片隅では油断できなかつた。皆様方の興をそぐようなことを言ってすまなんだ。ご持参くださった酒のうまさに度を越した所業（しょぎょう）と思うてご勘弁を。さあ、盃を干されよ」

そう言って酒を酌んだ。

神便鬼毒酒を五臓六腑にしこたま染み込ませた『石熊童子』は『虎熊童子』同様、酔いながら田楽踊りを舞い始めた。

渡辺綱もこれを見てすくと立ち上がって、

「我も、一差し」

と言って、石熊童子の舞に呼応するかのよう、

『年を経て鬼に岩屋に春の来て、風や誘いて花を散らさん』

と、謡（うた）ながら舞うのであった。

素面（しらふ）であれば、歌の意味はたちどころにわかりそうなものだが、酔いつぶれんばかりの童子たちにはわからない。

歌の意味は、「ここにいる鬼たちを春の嵐のように花を散らすように斬り散らそう」というものであった。

しばらくして、酒呑童子は覚束無い足取りで立ち上がって言う。

「客僧たちよ、そこでしばらくお休みくだされ。今宵はまことに気持ちよう酔うことができた。これも弘法大師さまのお導きであろう。有り難いお話しを承った。ではわしはこれで失礼つかまつる。三人の姫にあなたがたの世話をするように申し付けておいた。ごゆるりと。また明日会うとしましょう」

そう言って酒呑童子は奥の部屋に引っ込んでしまった。

残った童子たちは、酒呑童子が話しているときまでは、さすがにしゃんとしていたが、部屋に引っ込むと同時に、その場に寝てしまった。たぶん『神便鬼毒酒』が効いているのだろう

う。口までがだらしなく開（あ）いている。

頼光は残された三人の娘に話しかけた。三人は池田中納言国賢の娘、花園の姫、そしてもう一人は吉田中将の娘であった。

頼光は気ぜわしく話した。

「私は頼光と申すものです。拙者どもは姫君たちを救出するため酒呑童子を退治に参りました。酒呑童子のとりことなってさぞかし心細い思いをしたでしょう。もう大丈夫です」と、言うと、何とも意外な返事が返ってきた。

「お館（やかた）様にはとてもお世話になっております。最初連れて来られたときには、どうなることやらと胸がつぶれる思いをいたしましたが、しだいにそうではないことがわかりました。

今はお館様の側女（そばめ）となって、大江山での暮らしに満足しています。とてもお館様には親切にさせていただいております。洗濯や食事の支度も私たち自身でするようになって、自分で何かをするという喜びも知りました。私たちをここから救いだすというお考えでしたら、用なきこと。このままお帰りください」

と、池田中納言の娘が答えた。酒呑童子のことをお館様とさえ呼んでいるではないか。《そう言えば、酒呑童子は自分の生い立ちを話す中で、美貌のゆえに他の僧たちに疎（うと）まれたことを言っていた。多分、大江山での華美な暮らしだけが大江山に引き留めているのではなく、酒呑童子の男性的な魅力も一役かっているのであろう》

正直な話、頼光たちにとっても、大江山討伐は、姫たちの救出はたてまえである。本来の目的は鉄や水銀鉱脈、出雲・越後・朝鮮半島への交通至便という大江山の利権を酒呑童子から奪うことであった。

しかし、救出の表向きの大義名分が当事者から真っ向から、このように否定されでは行動が鈍る。次に、吉田中将の姫に違う意見を期待して頼光は尋ねた。

「貴女（あなた）は助け出されたいとお思いでしょう」

「私も池田の姫様と同じです。京の父上、母上もいとしいのですが、私たちはこの地へ輿（こし）入れしたのも同然でございます。生きていることの手応えが感じられる日々をおくっています」

吉田中将の姫が、きっぱりとそう言った。

《この娘も同じか……》

頼光は辟易した。これ以上この姫たちにかかづらわっていても無駄である。頼光たちは、笈から鎧や甲を装着して槍や剣を取り出した。各人がそれぞれの具足をつけている間に、百舌鳥はどこかに行っていた。すると、百舌鳥は大江山の鬼たちの武器庫から刀や甲を持ち出して戻ってきた。百舌鳥が持ってきた刀はどれも、さすが、酒呑童子のところで鍛練した刀であった。頼光は柄を握った瞬間ビーンと張り詰めたものが腕に伝わるを感じた。頼光らは持参した刀と取り替えることにした。笈の中に入れるように加工したので刀が短めになってしまっていた。鬼たちの刀の方が役に立つ。渡辺綱だけは、やはり使いなれた『鬼切』

を使うことにした。頼光は刀は取り替えたが、大江山へくる途中で渡された　の星甲だけは使うことにした。この星甲の上に、さらに『獅子王』の甲をかぶって、二重の防御とした。装備が済むと頼光は大きく武者ぶるいをし、一同を見わたし、『よし』と小声で合図した。頼光は百舌鳥に、

「酒呑童子の寝所に案内（あない）せよ」と、告げた。

百舌鳥を先頭に、石畳の廊下を抜けて行った。屋内に小川が流れている。架け渡した丸い石橋を、百舌鳥は歩いて渡らず、ひとつ飛びで飛び越した。百舌鳥が『傀儡女』であったことを頼光たちは再認識した。

さらに、石垣の壁で囲まれた通路をしばらく行くと、直角の曲がりかどに行き着いた。皆は、そこで百舌鳥に足止めをされた。

「お待ちください。しっ、お静かに。この先が酒呑童子の寝所（しんじょ）となっています。門番がいるので姿をまだ現さないでください」

覗くと、窓もなく鉄牢のような建物が見えた。好都合なことに寝所まで続く門扉は開いていた。普段は、これも閉まっているのだろう。

ただ困難なのは、門扉までの間に尖った先が天に向いている鉄柵があり、向こうから太い鉄の門（かんぬき）がしてある。おまけに、鬼の姿をした門番が槍を持って二人立っていた。

頼光たちが、考えあぐねていると。百舌鳥は束ねていた髪をほぐして、着物の胸のあたりを乳房が見えんばかりに、大きくはだけた。そして、酔ったふりをしながら、門番の方へよたよたと歩いていった。

「お館様、お館様。いつものお館様らしくもない。まだ宵のうちですよ。お休みになるのは早うございます」

甘えた声を出しながら、百舌鳥は酔っ払ったふりをして、『ふうっ』と大きく息をついて門扉の前で横たわった。

着物が割れて、太ももが露（あらわ）になった。

二人の門番は生唾を飲んだ。門番はお互いに顔を見合させて淫靡な笑いを浮かべた。そして、目配せをして次の行動を無言で確認し合った。

門番たちは門をあけ、百舌鳥を一人は脇を抱え、一人は両足を持って、門の中へ運ぼうとした。当然、槍は門の所へ置きっぱなし。門番たちは、背後を見せた。首は、二つ平行に並んで、いかにも斬ってくれといわんばかりである。電光石火の早業で、頼光と綱は、二人の門番の首と胴を切り離した。

頼光と綱はそれぞれ血刀を思い切り一振りして血を吹き飛ばした。

足音を忍ばして、鉄の門扉を通過すると襖があった。そっと襖を左右に滑らす。酒呑童子は女たちに添い寝をさせて寝込んでいた。

酒呑童子の体の大きさからして痺れ薬は痺れさすところまでいかなくて、むしろ酒呑童子を心地よい眠りに誘ったようだ。

金鎖で酒呑童子の手足を縛り、四方の柱に結び付けた。暴れだした時の動きを封じるためである。

頼光が指示を出した。

「わしが首を撥（は）ねる。綱と保昌と公時は前と後ろから胴や手足を寸断せよ。貞光と季武はまわ周りを見張れ、騒ぎを聞きつけて酒呑童子配下の者たちが来るに違いない」

頼光が、今まさに首を撥ねんとする時、酒呑童子が『かつ』と目を見開いた。

「うぬ貴様ら、何をする、騙したな！」

『怒髪（どはつ）天を衝（つ）く』とはこのことで、まさに激しい怒りの形相は六人をたじろがせた。

暴れて金鎖がちぎれそうである。

「お前ら、先程は、よくもあんな調子のよいことが言えたものだ。人を騙すために神仏の法を説くとは天罰が下ろうぞ」

酒呑童子のあまりの迫力に、どちらが縛られているのか分からぬ。

「問答無用！」

と、言って綱の剣が酒呑童子の胴を貫いた。身を捩（よじ）って悶え苦しむ酒呑童子は恨みの声をあげる。

「ううつ、鬼神に横道なきものを……」

酒呑童子は、血の涙を流していた。

酒呑童子は、役小角や弘法大師の話を聞かされ、安心しきって珍しく楽しい酒宴を味わった。身の上話などして完全に打ちとけた。配下のものたちも無礼講で歌ったり踊ったりした。

世間から鬼と恐れられていた酒呑童子は嘘はつかない。山人は嘘をつくことはできないのである。厳しい大自然のなかで嘘、つまり誤った情報は死につながる。長い間に培（つちか）われたこの正直さが今、里人たる頼光たちの嘘で固めた横しまな者に敗北していくのだ。

そんな酒呑童子の胴を貫いた綱は、普段の豪胆さに似合わず、この時ばかりは震えを止めることができなかつた。

綱は、自分が何かとてつもない、斬ってはならないものを斬ってしまったのではないかと恐れた。

『私が切ったのは鬼ではなく、ひょっとしたら神なのかも知れない……』

頼光は青ざめる綱を見て、

「斬れ、もっとだ！」

そう言うと、頼光は渾身の力をこめて刀を振り下ろし、酒呑童子の首を撥ねた。

勢いよく撥ねた首は力を失うどころか、憤怒そのものに生きて、頼光の『獅子王』の甲に咬みついた。しかし、その下の「ひひいろかね」の星甲まで歯が達すると、それ以上は咬み込めなかつた。

首は急速に勢いを失って床に転がつた。

首が離れた手足も、しばらくは、ばたばたと動いていた。綱に替わって公時が気でも違つ

たかのように、あるいはそうすることで恐れを振り払うかのように、酒呑童子をめった斬りにした。

一同が、ようやく気を鎮めた頃、百舌鳥がどこからか酒呑童子の首を入れのにちょうど良い大きさの朱櫃（しゅひつ）を持ってきた。

首を納めようとした時、一同はあっと驚いた。

先ほどまで慚愧（ざんき）の極（きわ）みを示していた酒呑童子の首の表情が、何と神々（こうごう）しいまでの微笑（ほほえ）みを湛（たた）えているではないか。

一同の誰かわからないが、つぶやいた。

「弥勒菩薩さまのようじや」

皆もそう感じた。

思わず頼光を含め、皆一斉に剣を翻（ひるがえ）して背中にまわし、片膝をつき頭（こうべ）を垂れて敬意を表した。全く自然の行為であった。

一方、百舌鳥は切り刻まれた胴に、そっと布を被せた。

やっと異変に気づき、酒呑童子方の鬼の四天王の童子たちが駆けつけた。

鬼の童子たちは、頼光たちに襲いかかったはよいが、神便鬼毒酒が効いているので、技に『切れ』がない。もう、頼光方の四天王の敵ではなかった。

あつと言う間に鬼の四天王は討ちとられてしまった。

四天王をなきものにして、ほっとした瞬間、綱の目の前を恐ろしい殺氣を漂わせて、黒い物が目の前をよぎった。

綱は、袂から生暖かく流れる血によって、ようやく自分が腕を斬りつけられいたのを知った。

「御館様によくも刃（やいば）を。恨みを晴らそうぞ。わしの腕前のほどは知っておろう、綱！」

《えらく身の軽い者だ。そうか、茨木童子が戻ってきたのだ。》

綱と茨木童子は激しくわたり合った。

あまりにも早い動きに他の者が加勢しようにもできない。

組み合っては、上になり下になり、間合いをとっては、剣と剣が火花を散らした。

両者が暫時、睨みあった。そして、その時百舌鳥が、酒呑童子の首が入った朱櫃を開け、首を茨木童子に見せながら叫んだ。

「観念せよ。お館様はこのようなお姿になられた！」

自分たち山人の味方だとばかり思っていた百舌鳥がそのように言うのと、変わり果てた酒呑童子を見て、茨木童子に一瞬の隙ができた。

もちろんそれを傍らの頼光は見逃さなかった。

「えいっ！」

頼光の腹の底から響きわたる気合とともに、茨木童子の首は宙を飛んだ。

頼光たちは、酒呑童子の首を持って、やってきた道順どおりに、逆にたどった。酒呑童子を

討ちとった後、石壁の通路を行くと、何か古代の王の墳墓の中を歩いているような錯覚がした。

頼光たちをもてなした大広間に出了。宮殿や楼閣は先ほどのままのたたずまいであったが、主人を失った景色は生彩がない。池田中納言の娘を含めて、多くの姫たちは酒呑童子の首の入っている箱を見て、泣きわめいた。そのうちの一人の姫がうつ伏せていて動かないのを見て、公時が不思議に思い、その姫を抱き起こした。

何と、堀河中納言の姫が胸を突いて自刃（じじん）してすでに事切（ことき）れていたのだった。

堀河中納言の姫は、酒呑童子を一途（いちず）に慕っていた。

「酒呑童子の子を身ごもっていました」

と、百舌鳥は複雑な面持ちで言った。

公時は思わず堀河中納言の娘にあわれを感じ、抱きかかえて髪を撫（な）でさすった。

「京へ帰りましたら、父母の方々には、よろしくお伝えしましょうぞ」

公時は涙でほほを濡らしながら、小刀で姫の髪を切り懐紙（ふところがみ）でそれを包んだ。菩提を弔うための形見である。

酒呑童子の四天王や茨木童子が討たれたとあっては、酒呑童子配下の男たちはもう戦う気を失せ、虚脱状態になってしまっていた。泣いている姫たちの中で、いささか居心地の悪さを感じた頼光は、

「姫様たちよ、これで京に帰ることができるのですぞ。お喜びなされ」

頼光の声は空しく響いた。姫たちは、頼光の声が聞こえていないかのように、袖に顔をあてて、そのまま泣きつづけている。

頼光は独り言を言った。

《わたしが何をしたというのだ。お前たちは助かったのではないか。酒呑童子は人さらいなのだ、悪党なのだ》

頼光は自分の心の中で、この討伐の真の目的を必死で隠していた。あくまでも、欺瞞に満ちた討伐を救出という美名で覆い隠したかったのだった。

そして、心の中のもう一人の頼光がほくそ笑んで囁く。

《これで、大江山の鉄は廟堂のものだ。私への恩賞はこの上もないものになるだろう》

保昌はといえば、もともとギラギラした野心は持っていたかった。帝の勅命であるので、それに従ったまでのことで。だから、この酒呑童子退治においても、鬼の四天王に一太刀浴びせたにすぎなかった。

獅子奮迅の働きをした四天王はというと、なまじ純な士魂（さむらいだましい）をもつているだけに、後味の思いをしていた。

「鬼神に横道なきものを……」

と、言った断末魔の酒呑童子の言葉が、四天王たちの耳の奥で破（わ）れ鐘（がね）のように響く。

酒呑童子の胴をすたずたに斬った坂田公時の目には、酒呑童子の菩薩のような顔が焼き付いていた。

《自分の剣は、本当に破邪の剣であったのか……》

公時は、明らかに自分の行動に釈然としたものを感じなかつた。貞光も季武も同じ気持ちを抱いていた。

百舌鳥が花火を上げたのか、松明の光を鏡に反射させて知らせたのか、夜が明けようとしたときは、何十人も次々と到着し、酒呑童子配下の者たちを捕縛していった。

間者ることは聞いていたが、こんなに多くの兵が近くで待機していたことは頼光たちは知らされていなかつた。

## 第7章 帰還

帰る道すがら、頼光は姫たちを諭（さと）した。

「京へ帰つたら、酒呑童子のことは話してはなりませぬ。まして酒呑童子を賛美することなどはもっての他ですぞ。酒呑童子はやはり鬼だったのです。酒呑童子を褒めることは貴女たちの父母を悲しませることにしかなりませぬ。あなたたちはこれから花も実もある人生なのですから。およろしいかな」

姫たちが敬愛する酒呑童子は、もうこの世にいない。帰るところは父母のところしかない。しかし姫たちは、酒呑童子のことは一生忘れないで心に秘めていくであろう。ふと、頼光は、池田中納言の娘を見やつた。

姫は、酒呑童子のことを想（おも）って泣きはらし、目が腫れぼつたくなっていた。それにしても、堀河中納言の姫のことはどう説明しようか頼光は窮した。酒呑童子の子まで身ごもって自刃したわけだが、本当のことを言っても、堀川中納言の姫は生き返つてこない。両親に話しても嘆くばかりであろう。頼光はそう考えて、公時の方を見た。公時が、堀川中納言の姫の髪を、懐紙におさめているのを見ていたからだった。

《公時がうまく説明してくれよう》

公時も、頼光に頼まれるまでもなく、そのつもりであった。それくらいのことは、むしろ自分からやりたいと思っていた。何かわからないが、一種の罪滅ぼしになるような気がしたのである。

大江山の麓の下村（しもむら）までくると、丹波の国司、大宮の大臣（おとど）という者が出迎えた。

大宮の大臣は、頼光たちが京へ帰つて廟堂に、今の丹波の国司が酒呑童子のなすがままにさせていたと報告されると困ると思った。国司としての責任を問われないように、点数かせぎに、できるだけの接待を頼光たちにしようとした。

頼光たちは、飲食物を充分補給し、再び出発した。

京に近い『古い坂』まできたところで、廟堂からの使者が来た。

「どうかお待ちください。酒呑童子の首実検 をしたら、首をこの古い坂で葬れとの道長様おおの仰せでございます」

頼光はいささか憤慨した面持ちで、

「いかなる故（ゆえ）じや」

「はい、京に穢れを持ち込むことはならぬとかで……」

「これは酒呑童子の首なるぞ。敵方とはいえ、首領であった。丁重に葬らなければならないのではないか」

これは嘘である。頼光は酒呑童子の首を丁重に葬る気などさらさらない。

酒呑童子の首を持って行くことで手柄を印象づけたかっただけの話である。

「もう朝議で決定しましたので……」

「もうよい、わかった」

道長だけの一存ではなく、正式に朝議で決定したのであれば、これ以上、抗（あらが）うことは却って頼光に不利になる。命令に従って埋葬することにした。

酒呑童子の首を埋葬したところは、現在では『古いの坂の首塚』と呼ばれている。

池田中納言の娘は父母に会うとさすがに、泣きながら「母上様」と叫んで母親の胸の中に飛び込んでいった。池田中納言は頼光の手をとって、これ以上ないと思われるほど有り難がった。

京へ戻った翌日、頼光と保昌は、帝に報告をするために謁見することになった。四天王は身分上、別の部屋に控えた。

一条帝は御簾ごしに頼光に言った。

「ご苦労であった。池田中納言も喜んでおる。よく六人ばかりの者で酒呑童子を退治した。

今後、頼光と保昌は昇殿を許す。他にも褒美をとらせよう。何なりと申せ」

頼光が口を開く。

「おそれながら、丹波国をご下賜（かし）されんことを」

頼光は抜け目がなかった。酒呑童子を自らが斬って大江山を陥落させたのだから、遠慮をしてみすみす他の者に渡すことはない。

鉄や交通の利権ばかりでなく、酒呑童子の財宝もそっくりそのまま残っている。すでに、部下の何人かは現地に残してきた。まして産鉄のうまみは父、源満仲から教えられて骨の髓まで知りつくしている。

もちろん、ある程度の利益は国庫に入るが、国司となって正直に収益全部を国庫に収める者などまずいない。利益は左大臣道長と頼光に充分流れ込むのであった。

帝は、頼光の望みを受け入れた。

「保昌はどうじや」

保昌は、畏まって押しだまっている。実際に酒呑童子退治にもそう目立つ働きはしなかつたが、頼光と同格の身分であったので一緒について行つただけでも、四天王より褒美（ほう

び) は大きい。

保昌がはっきりしないので、帝の御手すから賜りの言葉があった。

「では、頼光が丹波なら、お前には丹後の大庄三ヶ所をとらそう」

「ははっ」

頼光は、これを聞いて内心、

《駆け引きの下手な奴だな。そんなことだから南家は北家に勝てないのだ。こんな時だ、もう少し欲を出せばよいのに……》

藤原保昌は藤原南家の系統であった。保昌の祖父の代に、北家との権力闘争に敗れてから日の目をみない一門になってしまった。保昌は北家の道長に近づいて何とか勢力を保持していた。あまり目立つと排斥されるので持ち前の鷹揚さを隠れ蓑にして、世渡りをしていた。

頼光がそんな一種の優越感にひたっていた時、保昌が口ごもりながら帝に奏上した。

「恐れながら、もう一つだけ望みがございます」

保昌がそう言った時、冷水を浴びせられたように、頼光の顔色が変わった。

「何じや、何なりと申せ」

と、帝が少し驚いて言うと、

「和泉式部を賜りたく……」

文才歌才に恵まれ、書や管弦にも秀でた和泉式部……。道長が娘の中宮彰子に箔をつけるために集めた女官の一人であり、すでに三十三歳になつてはいたものの、いまだ美貌の才媛である。

その和泉式部を保昌が見始めた。

「左府がとりはからうであろう」

道長は笏（しゃく）を胸にあてて、腰を折って『承知』の礼をした。

頼光は胸をなでおろした。保昌が口を開いた時ひやりとしたが、何のことはない。所望したのは女一人だった。

《武人ともあろうものが、望みがたつた一人の女とはあきれた……》

だが、この保昌の無欲が実のところ、頼光との親交を長続きさせているのであった。

もし、保昌が頼光と同じような野心めいたものが毫（ごう）ほどでもあれば、頼光は保昌を遠ざけていたに違いないし、また道長との相談の中で、大江山討伐の人選にも加えていかなかつただろう。

こうして、頼光は丹波守に、藤原保昌は丹後守に任じられた。保昌はさっそく和泉式部を娶（めと）り、翌年には丹後に赴任していった。

和泉式部は、最初の夫、橘道貞が和泉守だったところから離婚後でさえ、ずっと、「和泉」式部と名乗っていたが、道貞が死に藤原保昌に嫁いでからはさすがに和泉式部とは言えず、「大江家」の江の字をとつて「江式部（ごうのしきぶ）」と名乗るようになった。

式部と最初の夫、橘道貞との間に生まれた子に小式部内侍（こしきぶのないし）がいる。歌詠みの才の誉れ高い和泉式部に劣らず、やはり蛙の子は蛙か、和歌を詠む才能に富んでいた。

和泉式部が丹後にいるころ、この小式部にちょっとした出来事があった。

藤原公任（ふじわらのきんとう）の嫡男、定頼（さだより）が小式部の局を通りすぎる時に、「丹後につかわしける人はまいりたるにや」と、言ってひやかした。丹後にいる和泉式部に代筆を頼んでいるのではないかとからかったのである。

それに対し、

大江山いくの道の遠ければ  
まだふみも見ず天の橋立

と、応酬したことは有名である。

そんな、小式部内侍も早逝する。和泉式部は世の無常感をひしひしと感じた。おのずと和泉式部は丹後の海を思い出すのであった。

《いったい何本の松があるのでしょうか》

天の橋立の松並木の生えた砂嘴と背後に広がる大海原を思い出してはその無常感を癒すのであった。

「もう一度、丹後の海を見たい」

それが、晩年の和泉式部の口癖になった。

頼光は丹波守を経て、長保三年（1004）に五十七歳で美濃守に転じた。同じ年に、頼光は娘を道長の異母弟の道綱大納言に嫁がせ、摂関家とますます密接な関係となり、勢力を確固たるものにしていった。

一世一代の運命の賭として酒呑童子退治をした頼光も治安元年（1021）七月十九日、摂津守を最後に七十四歳で生涯を閉じる。

頼光は、人には明かしてはいないが、酒呑童子の命日には、必ず『老い坂』の首塚まで行って手を合わせていた。道長は頼光が死去した六年後に落命した。それ以後、栄華をきわめた藤原氏は衰退へ向かっていった。

頼光なきあとは、源氏の主導権は弟の頼信に移った。頼信は平忠常の乱を平定することにより、その系統を栄えさせる。その系統から出た頼義・義家が前九年・後三年で活躍し、さらに、義朝・頼朝を輩出して源氏が貴族社会に変わって本格的な武家社会を築いていったのである。

時移り事（こと）去って、酒呑童子退治の話は、時の権勢を恐れて、酒呑童子は世にも恐ろしい鬼として語り継がれていくのであった。（完）